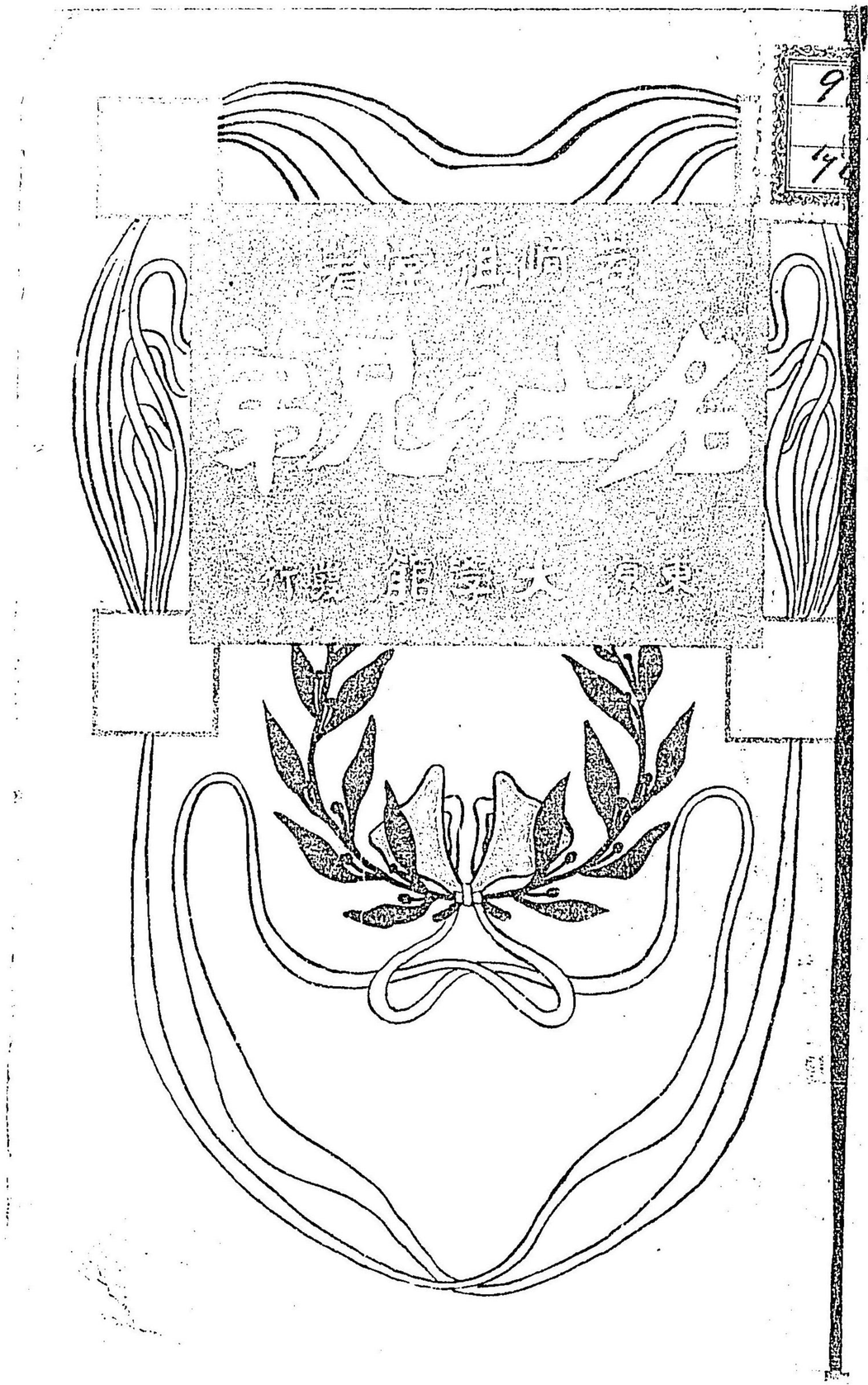


のあるのは、瓜の兄弟に瓜の生るやうなもので、
ぬが、一方から考へると仲々そうではない、假
ても、二千と三千同じやうには出來ないのに、手
間を丸めやうといふのだから、一人でも滿足に
成育るといふは容易でない、それに幾人も、同じやうに育らへやう
といふ、父母の苦心は思ひやらるゝ
彼の細領の西六で、三千五人目の末弟は利巧だといふのは、家庭も
境遇も常に同じてない結果で、人間は復雜な生活をしてゐるのは
爰らて知り得られる、孟母の三遷も古めかしいが、兄弟何づれも俊

秀の擧れを取るに至るのは、父母の良否に依るので、特に母は大ひに與かつて力あるのだ、如何のは良母であるかといふに、學問より

名士の兄弟

も才智よりも德行にあるので、今の女學生のやうに、學問をして、德行の修まらない出からは、狂人が生れる

英雄から英雄、美人から美人、神ころから神ころが生れると極つてゐたら、尾張の百姓から關白が出ず、ルシヤの農民からナポレオンが出ない、馬子の子は萬代馬子でなければならぬが、世の中は廻り持ちといふ譯でもあるまいが、英雄も、豪傑も、美人も、才子も、多くは自分よりもエライ者を生ない、人間の丸め方は、餘程面倒なものと見ゆる

序文

そこで兄弟が皆名士になつたのは、如何いふ次第かと思ふに、第一父母が同じて、教育も同じ、お負けに先になつた兄弟が、後に居る兄弟の手を引張つて與るから、楽して左程苦勞せずに、一打位なの名士がぞろ〳〵出來上る、それが即々名士製造法の秘訣である。併し名士にも幾通りもあること、日本酒の濁酒から段々上つて、正眞の正宗まであるやうなもので、一升四五十錢の酒は、至る處の酒屋で製造してゐるが、正宗となると難てなければ出來ない、人間の正宗も同じこと、天才とか大偉人とか云つて、千載に喝仰せらるゝ人は、一つの肚から矢鱈に飛び出しては來ない、犬でも一足生れば利巧で強い、先づこんな道理なのだ、尤も釋迦や、老子や、孔子など

といふ人々が續々出て來られて、溜るものではない、さて見ると造化の配合は、流石に旨いものさ。

名士の兄弟

兎に角六條判官のやうに、幾十人といふ子を産たならば、その内に二人や三人のえらい人物が出來たとて、まぐれ當りといふ事もあるが、四人か五人の兄弟は先づ無難に出來て、相應の位置を得てゐるのは、一國の爲めにも、一家の爲めにも、日出度いととてある、特に余は、その母の德を欣羨するものてある。

目次

江木兄弟……一
江木裏　江木千之

渡邊兄弟……六
渡邊國武　渡邊千秋

若尾兄弟……九
若尾逸平　若尾幾造

高梨兄弟……一五
高梨哲四郎　須藤時一郎

益田兄弟……二〇
益田孝　益田克德

菊地兄弟……菊地大麓　錦作佳吉　錦作元八……二四
中村兄弟……中村進午　中村弼……二九
坪井兄弟……坪井正五郎　坪井次郎……三二
陸奥兄弟……陸奥廣吉　吉川潤吉……三五
大久保兄弟……大久保利和　牧野伸顯　大久保利武……三九
一木兄弟……一木喜德郎　岡田良平……四四

渡邊兄弟……渡邊昇　渡邊清……四八
岡松兄弟……岡松參太郎　井上匡四郎……五二
德大寺兄弟……德大寺實則　住友吉左衛門……五五
柴兄弟……柴四郎　柴五郎……五八
矢野兄弟……矢野文雄　小栗貞雄……六三
井上兄弟……井上務之助　伊藤勇吉……六八

中澤兄弟……七一
中澤彦吉　中澤彦七
久米兄弟……七六
久米金彌　久米恒松　久米駒吉
伊東兄弟……七九
伊東巳代治　伊東祐業
穗積兄弟……八三
穗積陳重　穗積八束
幸田兄弟……八七
幸田成行　郡司成忠　幸田成友
有賀兄弟……九二
有賀長雄　有賀長文

櫻井兄弟……九五
櫻井房記　櫻井省三　櫻井錠二
太田兄弟……九八
太田資美　太田資時
德川兄弟……一〇一
德川家達　德川達孝
德富兄弟……一〇四
德富猪一郎　德富健二郎
岡村兄弟……一〇七
岡村輝彦　岡村龍彦
伊澤兄弟……一一一
伊澤修二　伊澤多喜男

林兄弟……一四
林有造　岩村高俊　岩村通俊
寺尾兄弟……一八
寺尾壽　寺尾亨　江川益
安田兄弟……二二
小野臣太郎
安田善彌　安田善助
長谷川兄弟……二六
長谷川泰　長谷川順次郎

名士の兄弟一

波邊千秋

波邊國武

德川家達

林有造

名士の兄弟

林兄弟……一四

林有造　岩村高俊　岩村通俊

寺尾兄弟……二一

寺尾亨　寺尾陸川

小野田太郎

安田兄弟……二三

安田善明　安田善助

長谷川兄弟……二九

長谷川峻　長谷川謙次郎

名士の兄弟一

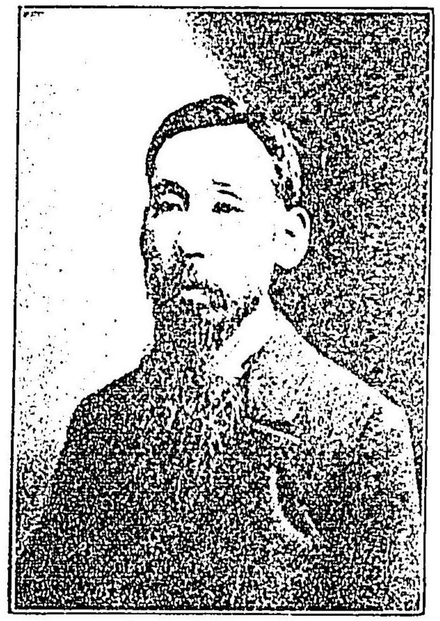
渡邊千秋

渡邊國武

德川家達

林有造

名士の兄弟二



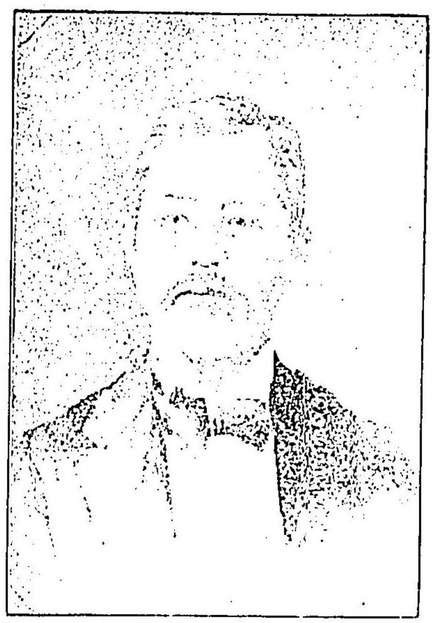
穂積八束

穂積陳重

牧野伸顕

益田孝

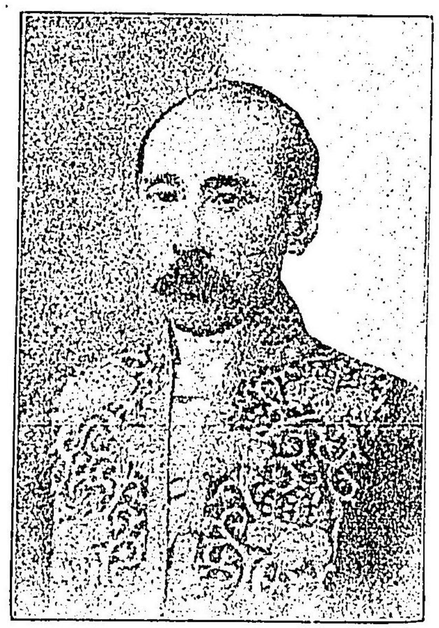
名士の兄弟三



有賀長文

有賀長雄

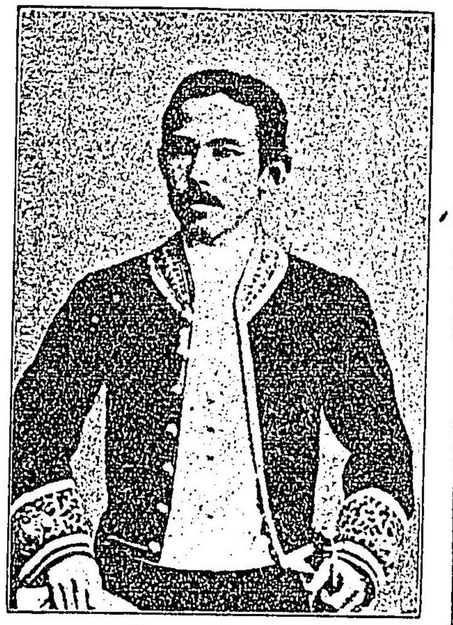
渡邊昇



矢野文雄

名士の兄弟四

柴五郎



柴四郎

若尾幾造

郡司成忠

名士の兄弟

江木兄弟

兄、は廣島縣知事
弟、は法學博士辯護士

岩崎徂堂著

江木兄弟

(一)

江木衷博士は廣島縣出身の人である、代々藩主吉川家に仕へた、博士は著者の恩師であるから、從つて其如何なる人物であるかと云ふ事は、能く知つて居る、其初め大學に在る時分より生徒中の不勉强家であつたが、其代りには毎時でも、第一番の席を何人にも渡さなかつたと云ふ話である、博士と同級であつた今の法政局長官奥田義人なども充分勉强家で、試驗前ときたら、眠らず食ずて、勉强したのに引換へ、博士は毎日勉强とては少しもせず、勝手な熱を吹いて遊んで居つた、試驗の結果になつて見ると、江木が一番なので、一同の生徒は擧げて江木の學力に敬服したさうだ、夫れ

は其筆、博士の頭は他の者の頭と、大に違つて居るのである、世に一を聞て十を知ると云ふ人物はあるが博士は一を聞て百を知る躰の男であるから、毎日〳〵學校に行つて、教師の講釋を聞くには及ばない、當時如何な勉强家が出て來ても、博士に勝つ氣遣は到底無かつたのである、流石の奥田も、卒業迄とを〳〵博士に一番の席を、占領されつきりになつて終まつたのは、氣の毒な事であつた、偖て卒業して法學士の稱號を取り、世に出て見ると、江木學士の名が知れて來た、夫れから英吉利法律學校の講師となつて、刑法の講義をすると、明論卓説、斬新奇拔なので、學生を初め斯法學者は相見て、之れは大變な學者が出て來たと、只驚く許り、其後刑法論の著を公けにしたものだから、江木學士の名は恰んど天下に博まつたのである、笈を負ふて東都に上る者皆な江木の門下たらんと欲して、相競ふて英吉利法律學校に入つたのは、當時の情況を知るもの〻常に口にする所である、此の如く、江木博士は刑法論に長じて居るが、元來緻密周到で、最も强健の腦漿を持つて居る男だ、て只に刑法論許で無い、

法學とあらば、刑法でも民法でも、訴訟法でも國際法でも、何でも御坐れと云ふ主義、何を講義しても卓絶して居るには、世人の深く感服するのである、殊に博士は講義中、世界のありとあらゆる學者の諸説を引出しては、一々之に批評を加へ、痛罵詆諆至らざるなきに於ては、博士に及ぶものが一人も無いと云ふて宜しい、後司法省や内務省の高等官となつたが、兎角俗物の大臣とは意見が合はないので、忽ち罷めて終まつて、辯護士となつたのである、夫れから法典調査會委員となり、續て法學博士の稱號を授與された、然し先生の眼中には博士などと、形式的に言はゞ犬の頸輪は要らぬので、博士位は元より當然で、若し先生をしなければ、外にする者が無い、否な政府が博士安賣の今日に於ては、余輩は先生に向つて、大博士若くは金鵄博士とでも、云ふやうな稱號を授與するの至當なるものと信じて居る、余は終りに、先生の人物を短評するが、先生は勇膽で且果斷である、特に先見の明に富んで居る、博覽强學の識は、經國の偉業を奏すべく、緻密周到の頭腦は、如何なる紛亂錯綜をも、氷解せしむべく、節

義の凛乎たることは、金鐵の如く、其仁俠心は、子弟を始め衆に及ぼし、其風采其心膽は、實に當代の一大傑である、余輩が信仰し、崇拜し、推重すべき者は、只先生一人の外は無いのである。

江木千之　氏は先生の令兄で、現に廣島縣の知事を奉職されて居る、剛直で、正確で、緻密な所は、將さに先生と相似て居る、然し人物としての貫目を量つて見たなれば、遠く弟には及ば無いのである、君は永く官海にあり、十年前より知事中の事務家として、知られて居つた、爲すことが至つて着實に、公平であるから、何處へ行つても批難された例が無い、著者が覺えて居る許りでも栃木、茨城、愛知、廣島等數ヶ所の縣知事に任ぜられたが、江木は善く無い、感心し無い男だと、言はれた風説だに聞かぬ所を見れば、彼れ又俗物にあらざる事が分かるのである、兎角地方官の任免は、中央政府の役人が更迭する毎に、己れも免官せられ、若くは任命せらるゝのが今日の有樣に見受けらるゝが、此江木は如何なる内閣が出來樣が、そんな事には頓着せない、一向

平氣でやつて居る、何ぜとなれば君には一つ敵がない、否どんな内閣が組織されても、彼れは知事として、据置く可き好人物であると目せらるゝからである、茲は君の特長として賞贊すると同時に、君を以て永久知事に祭り込んで終まつたと思へば、誠に氣の毒に堪へん話だ、然し君は幸に官海の硬骨男として世に名を博したのに至つては、又一個の人物と言はざるを得ないのである。

渡邊兄弟

兄、は男爵宮內省內頭察
弟、は前大藏大臣子爵

渡邊國武　子は長野縣出身の人である、何も藩閥のお蔭があるのでもなく、去りとて維新の勳功があるものでも無い、彼れは只身を俗吏より起して、累進し次官となり、遂には大臣と迄經上つたのである、丁度出世の有樣が、今の司法大臣清浦奎吾と同じなのだ、彼れは禪學に長じ且つ少しは詩を作ることも出來る、常に源爲朝を崇拜して有爲の大英雄と稱して居るさうだ、其何故であるかと問ふたなれば、答て曰ふのに、爲朝の素行或時は夜叉の加く、赤子の如く、時に剛にして柔耻を知り、識量がある、兵に通じて精妙を極めて居る、彼れは其三旨に均しく、發達して、一方に偏欲しない、之れ即ち爲朝を英雄となす所以であると言はれた、して見ると君は之を學ばんと欲するものであるか、常に鬼谷子戰國策を讀んで居る、彼れは謀權術數の策士を希ふとするのかも知れぬ、兎に角彼れは爲す所が、とんと要領を得ざるが如く見ゆるが、或人

は君を評して、其大に要領を得ないのは、大に要領を得たるが爲めであると云はれた、適評と思ふ、彼れは虛名を博して後に、實力を養ふのは、之れが處世の秘訣であると心得て居るさうだが、中々喰へない人物である、殊に其剛膽であつて、思想綿密なのには感服する、彼の財政問題から伊藤の總理を始め他の閣員一同を相手に、意血の張りッコをしたことは、遂此頃の事實であつたが、とう〳〵流石の伊藤も堪へ切れぬので辭職して終まつたのである、誰れしもこんなに强情の渡邊とは思はなかつた、そこで君は、爭ふべき相手が無くなつたのに、獨り辭表も出さ無いでがん張つて居つたので、世人より種々の批難を受けた所から、遂に辭職して民間に下つた、此事實はある方面に彼れ是れと攻擊を受けたが、他の一面からは中々見掛けに依らぬ男だと評せられて、全く人物を上げたのである、後深く考ふる所があつたと見へて、支那を始め歐米漫遊を思立ち、目下其途に就て居るが、彼れが歐米の異空氣を吸收して歸つて來た後は、又一花を咲かすてあらうとは、余の豫言する所である。

渡邊千秋　男は國武氏の實兄である、今は世に無い、あの勝安房が、極へンテコな歌らしきものを作つて、世人を笑感させた事がある、夫れは如何ゆふ文句かと言へば、渡邊は兎角弟が勝りけり、清昇に千秋國武と云ふ歌ださうだ、之れは全くの話である から、聞く者は一同笑つたが、後に感心したのである、そこで弟の國武は、大臣と迄出世したが、兄の千秋男は北海道長官から、今では宮內省に入つて、內頭寮と云ふ隱居役になつて終まつた、君自からも大臣になる事は出來まいと、豫め覺悟はしたろうし、吾人も君を認めて大臣たるの器で無いとは十人十指である、同感である、其長官となり內頭寮となつたのも、或は全く弟の反影かも知れ無い、然し彼が剛膽のある所などは、却て弟に敎へたかも分からないが、人物の貫目を見たならば、殆んど百貫目も輕いのである、兎もあれ兄弟二人が今日の出世は、實に名譽な譯だ。

若尾兄弟

兄、は八十四國立銀行頭取
弟、は日本鐵道會社取締役

若尾逸平　氏は甲斐國中巨摩郡出身の者で、文政三年十二月を以て生れた、幼年の折から武藝を修め、これにて身を立んと志さし、鄕を脫して江戸に上り、旗本淸水某の侍奉公となり、主家に仕へたのである、兎角するうちに、國からは父の病氣が危篤だと言ふ急報が來たので、君も慌いて主人に乞ふて、國へ歸つて見ると全くの虛り、そをして書面を送らなければ、彼れは歸つて來ないだらうから、詐り事を作つて呼び寄せようと、親類同志が謀略であつた、父は至つて壯健、平常の如くであつたのを見て、君はとんだ罠にかゝつたと落膽したのである、すると父は君に向ひ、今汝が江戸に上るの不可を稱へ、再度の上京を許さなかつたので、止むを得ず父の膝下で、家事を勵み、傍ら金二兩と桃、の實十駄とやらを、資本に請ふて商賣を始めた、每日〳〵信州路へ賣りに行つたが思ふ樣に行かぬので損をして終まつた、夫れから自作の葉煙草を

賣り、之れで多少の金儲をしたものだから、面白くて堪まらない、更らに繰綿の仲買を始め、又或時は小間物雜貨を買入れて、近郷各村に賣弗ぎ幾分かの利益を得た、茲に始めて商業の妙味を會得する事が出來たのである、所が君は非常に勤勉で、稼業に熱心なる男だと云ふ事が界隈の評判になると、折りしも同郡小笠原村の富商某が君の家に來て、何卒養子に貰ひたいと逼つたので、君の嚴父も先の懇望を謝絶し兼ね、且つ非常の豪商と云ふ所から、快諾して養子とすることになつた、さあ行つて見ると案外な話、借金許りで、殆んど財産などは他人の手に渡つて終まつた後、殊に其家の親族は頭を鳩めて苦慮して居る有樣である、然し緣あつて婿に來て見れば止むを得ない、そして今の此耻は我耻となる譯である、余は何とかして此耻を洗ひ、此債務を皆濟し、此家を回復してやらうと決心し、夫れより一生懸命に商業を勵んだ、吾人は此一擧に於ても、君の人物を豫想する事が出來るのである、約七年を經過すると、全く借金を返し畢る事を得たと云ふ話には、實に感心の次第である、其内に君は病氣になつたものだで、伊豆の溫泉に治療に行つた、其不在中君の妻が破倫を働たので、之れが君の耳に入つたが、當時は未だ君が居らなくつては家族が生活を全ふする事が叶はぬ有樣、今少し堪忍して一家の整理を終へ然る後に決しようと夫れより一苦みをした、其甲斐あつて僅かの月日に思ふ通りになつたものだから、此時こそ決心すべき期であると、直ちに離婚を申し込み、其の家を去つた、當時君は家の金錢は勿論、一の物品だに身にせず、行き去つたとは、吾人をして益々感服せしむる次第である、之れからは獨身何でも思ふ事が出來ると、鄕里に歸つて父に逐一事情を陳べ、且つ少許の資本を借りて、篠卷商となり、忽ち一儲をした、因て嘗に借りたる資本を父に償却し、今度は荒物店を開業した、始めると早々繁盛して、大夫善き區合に見へたが、相場の變動で損失した、そこで財産悉く賣拂つて、一兩二分を得、之れにて甲府町へ家を借り、呉服の切端を賣りに出懸けたのである、所が日に賣行きが善くつて、三年の後には六百餘兩も殘す樣になつた、之れが將來商海に雄飛するの端緒となり、君は此を

資本として郷國居町と云ふ所に呉服太物店を開き、實弟の幾造氏と協力して家業に熱中した、天如何で此人物を見棄つべき、日毎に繁盛し年毎に業務を擴張する樣になつた、萬延元年に横濱の開港を耳にすると、此期失ふべからずとなし、先づ其地に商況を視察し、直ちに貿易店を開いた、君が非常の冒險は全く其効を奏して、巨萬の利を博したのである、其れから外國人は日を逐ふて入港して來るので、郷里名産の水晶を買收して、之を横濱に送り、一舉に數千の利を獲た、今度は生糸商を營み、信州や甲州から生糸を買入れて横濱に輸送し、外人に賣り付けたので、之れ又非常の利益を占め、續て絲取器械を發明し、自から工場を建築して數十名の工女を使役し、製糸を始めた、彼れは慶應より明治の初年に懸けて莫大の財産を作り、遂に貴族院多額納税議員となり、府下有數の會社に重役となり、今は日本實業大家の一人と推重せらるゝに至つたのである、君の半生の經歴を讀むもの、如何に其豪邁、堅忍、商機を見るの敏英であつて、膽大なるかを知る事が出來る、君は此かる性行を帶ぶる許りて無い、己れが累積した資産の幾分を、十人の手代及び實兄に與へて、各々其家産を治めさせ、殘つた部分の半額を弟幾造に與へ、且つ横濱の支店主幹とさせたと云ふが、其仁俠に富み、兄弟に友あるの心深きに至つては、誰れか又君を愛慕せない者は無いのである、吾人が君をして商海の偉人と尊重するのも全く無理ならぬのである。

若尾幾造　氏は逸平と共に世に並び聞て居る、兄と同心協力して、郷國に呉服商を營み、互に相和合して業を勵んだ、兎角兄弟などゝ云ふ者は、互に讓歩する事が難いので、相爭ふのは幼年時代より我々に與へたる一の經驗である、然るに君は之に反し、能く其艱苦を共にした、之れ兄弟二人が今日に於ける榮を得た所以である、殊に明治の初年横濱にて貿易業を營み、一舉に巨萬の利を占めた手腕は、全く弟の幾造にあると言ふても宜しい、克く時機に投じ先見の明を以て、兄の力を補助したる功は、著しきものである、其一度資財の分與を受け、且つ横濱支店の主幹となるや、業務を擴張し、最も正確にした、爲めに一層世の信用を得た時に兄の逸平に機を告げては郷里

に土地を買はしめ、傍ら爲換業を勸めた結果は、絶大の資産を增殖したのも、令弟幾造の力である、君今は實業界の一人物と稱せられ、日本鐵道を始め、其他著名の銀行會社に、重役たらざるは無き有樣である、兄弟二人が苦心に堪へ、艱難を嘗めて、遂に一花を咲かせたのは、誠に名譽の次第である。

高梨兄弟

兄、は市會議員
弟、は代議士横濱取引所理事長

高梨哲四郎　氏は、其昔長髮議員吉原博士と云ふ綽名を以て、普く世に知られて居つた、一から十まで、何んでもかでも、淺草の事は此高梨でなければ、ならぬと云ふ程勢力があつたものである、然し榮枯盛衰は自然の止むを得ざるもの、此頃では大に名聲が消て終まつた感なき能はざるのである、そこで、彼れが來歷に就て一言するが、彼が曾祖父は高梨丹治と云ふて、素信州高梨村の農民であつたが、江戸に出て幕府に仕へた、偖て此丹治には子供が在つたけれども、庸愚で在つて家を嗣がしむる事が出來ない所から、己れの徒弟を以て家譜を繼がせた、夫れが即ち勘平と云ふ男で、豪宕不羈の人物であつた、信ずる所鐵石の如く、欲する所は自ら處し、更らに他の干涉を受け無いとゆふ有樣であつたから、遂には閣老水野越州の忌諱に觸れる所となり、家名を斷絶されて終まつたのである、勘平には房子と名けた一人の娘が在つたによつて、

常陸の仙太夫なるものを納れて其娘に配した、そこで高梨四人の兄弟が生れた譯である、長男が須藤時一郎で、次男が沼間守一、君は其末男である、次男の沼間守一は兄弟中でも一等の人物であつたが、惜いことには死んで終まつた、今迄生活して置たならば、如何位威らい位地に就たかも知れなかつたのである、處で君の母房子は、中々明敏の方で、貞操節烈の女丈夫と、世間よりも賞賛されて居つた、そういふ家庭に育てられた君の事であるから、少時より英敏であつた、長して尺振八の塾に入り、英學を修め、後大藏省の役人となつたか、幾くもならないで官を罷めて、專心法律の學問を研究し、明治十三年に免許代言人となつたのである、是れぞ君が世に知らるゝの端緒であつた、殊に君の議論が明晰で、雄辯滔々、絶えざること泉源の如しと、評してもよい位、忽ち君の名聲世に傳はつて來た、明治十四年に改進黨に加はつて、島田や兄の沼間等と各地に遊說を試み、雄辯家を以て政海に名を博した、二十三年帝國議會の開かるゝと、衆望によつて府下第六區から推されて代議士となつた、其議場に顯はるゝや、長髪議員の高梨は、第一等に目を惹いたのである、廿九年松隈内閣の成ると、君は擢んでられ臺灣總督府の民政局の參事官に任せられたので、あたら惜しき長髪を切り去つて、渡臺して終まつたのである、暫らくの間其職に在つたが、再ひ歸京して辨護士となり、次て第十一議會の解散と共に、同區より撰ばれて代議士となつた、當時進歩自由兩黨の互に相反抗甚たしかつたが、君は中立議員を糾めて山下倶樂部なるものを組織し、其牛耳を執つて居た、三十三年六月横濱株式取引所理事長に推選されたのを以て、辨護士を罷めて其地に住を移したのである、そこで余輩は彼を批評するが、彼の資性至て大度溫容克く人を容る所は、誠に感服する、全躰からするならば、今日は大臣位になる事が出來た人間である、然るに其始か餘りに盛んになり過ぎたから、末の衰へも從つて甚だしい、丁度福地源一郎なとも、高梨と同じて、明治十四五年頃は、飛ぶ鳥をも落す位の勢力を持て居つたが、今は見る影もないと同じ事で、高梨も吉原博士と云はるゝ頃の勢力、今何れへか飛ひ去つて形がないのである、此點は

實に氣の毒なものだ、然し乍ら櫻痴とは違つて、中々の人物で在ることは吾人の認むる處、彼れか性行が常に、彼れの人物たることを誤らしめぬと思へば、流石沼間守一の弟として恥ぢない、只彼れは風雲に乘じて、飛躍したのは、上出來であつたが、前後左右を顧慮するの暇がなくつて、遂に自から力負けをして終まつたのである、茲が君の弱點で今日の如き有樣を見るに至つた譯である、所が其長兄の須磨時一郎　氏はそんな事は無い、最も着實に世と能く推し讓つて行つたのである、故に弟の高梨の如く、非常な名聲を博し得られないが、又一時に聲價を落さなかつた、まさか長男は長男だけに、弟の沼間や高梨よりは一層沈着に溫良である、故に吾人は君を俟つに斯邊の長所を以てした、其衆望に依つて東京市區會議長となり、又は高梨の後を繼ぎ、府下の第六區から代議士となつた事がある、さて爰に面白かつたのは君と弟の高梨とが選擧競爭の一件である、兄弟互に源平に分かれて、淺草から打つて出ようと、非常に激烈なる競爭を試みた事がある、吾人は之を見て、何故互に讓歩せ

ざるか、然かも血を分けた兄弟で、敵對するとは、餘り穩當で無いと云ふて、二人に向つて、批難の聲を放たれた事は、當時の情況を知る者の耳にした所である、之れ等の事實は大に兄弟の名望を、底落せしめた有力なる證據であつた、余輩は思ふのに、何も代議士の選擧位に、兄弟互に相反目しやうなどゝは以の外である、のみならず、丈夫のする事で無い、若し沼間でも生活て居つたなら、兄弟の二人は一言の下に、大目玉を喰つて終まうであつたらう、否な始から競爭などはしなかつたのに、相違ないのである、惜い事には人物の沼間が、世に無き人となつて居つたので、後に殘つた兄弟が、負けず劣らずつまらぬ意血を張つたのは、實に千秋の遺憾である。

益田兄弟

兄、は三井物産會社長
弟、は商業會議所員、製帆會社長

益田孝　氏は佐渡相川の人である、父を鳳氏と云ひ其長子である、安政二年の事であつたか、父と共に江戸に上りて、漢學を修めた、其後君は東洋將來の氣運を按じて、經濟の學を修むることゝなり、次で名村五八郎と云ふ男に就て、英學を研究したのである、安政の六年父の鳳氏は、幕府より召されて、外交の樞議に任せられた、此時君も英學に長して居つたものだから、其屬吏に登用された、之れより才名早く世に知られ、元治三年幕府は、池田筑後守を使節として、外國に派遣することゝなつた、其時父の鳳氏も隨行を命ぜられたものだから、君も强請して止まず、とを〳〵親子兩人が歐洲に行くことが出來たのである、暫らくの間彼地に止まつたが、後歸朝して佛學を修め、沼間守一と共に下士官見習となり、慶應三年には、騎兵頭に迄昇進したのである、君が今日に於ける、商戰の一飛將となつた其の機鋒は、實に此時に發したと云ふ

ても宜しい、後王政維新となり、世の狀態が將さに一變したのを見て、深く悟る所があつたか、忽ち商界に飛躍するの決心を起し、先づ横濱に行きて、製茶賣込の業に從事した、所が中々工合が良いので、更らに五代友厚や岡田平治等と提携して、金銀分拆の事業を興した、其後井上馨が大藏大輔となつたので、兼ねて懇親の間柄から、君又大藏省の四等出仕に補せられ、造幣權頭に任ぜられたが、間もなく官を罷めて、先收會社の副會長となり、後其社を解くや、君は有志と謀つて、三井物産會社を日本橋阪本町に創立した、衆望は君をして社長に推擧したのである、夫れから百般の事業は、皆な君の計畫の下に營むことゝなつた、君は切りに海外輸出を試み、且つ諸外港に支店を設立し社務を擴張した、此れより君の名聲天下に轟き、外國からの注文は、悉く三井物産會社に向つてやつて來る樣な姿勢となつたのである、以上の經歷は實に君が人物たることを證するに充分である、殊に人と成り恭敬謹直、絶へて疎放の氣風かない、而して形容肅々なるもので、例令談論なりとも、苟しくもせないと云ふに

至つては、益々君の性行に服するものである、唯れか又君をして實業界の傑物と稱揚せないものは無い、然るに其令弟に

益田克德　氏なるものがある、兄弟相揃ふて商海の傑物と知られて居るのは實に不可思議と云ふても宜しい、先づ君が經歷に就て一言する所があらう、君は嘉永五年正月を以て生れた、其初め兄の孝及ひ沼間守一等と、幕府洋式兵制の見習生となつたが、後大に知る所があつたと見えて、辭して横濱に至り、米人某に從ひ英語を修めた、夫れから明治初年となつて、慶應義塾に入學して專心一意苦學した、二年の後、高松で英學校を創立すると云ふので、君は聘せられて其校長となつた、さあ行つて見ると面白くない、今度は大阪の造幣寮に仕へたが、間もなく司法省に轉して判事に任せられた、此くして職に勤勵して居ると、明治五年七月に、司法卿の江藤新平が理事官となつて、歐洲へ派遣せらるゝことになつた、君は直ちに隨行を命せられたのである、此の舉は眞に君をして天下に勇飛せしむるの、原動力となつた、君は先づ歐洲各地を

一周し、六年の九月六日日本に歸つて來た、一度歐米文明の新空氣を呼吸した君の事とて、歸つて來ると、官に就て居ることの馬鹿〳〵しさが分かつたものだから、忽ち辭して終まつた、夫れから歐洲に於て、言論の自由が頻りに行はれて居るのに感じ、宜しく民心を收攬し、當世を聳動するのは、此言論で無けらねならぬと、茲に沼間守一、小畑美稻、須藤時一郎等の連中と相謀つて、鷄鳴社なるものを設け、盛んに政談演說を催し、國民の政治思想を喚起せしめた、君か小壯の身を以て、政界に名聲を馳せたのは、實に此時に在つたのである後時勢の變遷を達觀して、實業海に飛び込み、十二年八月には東京海上保險會社を設立し、續て諸他の會社に關係することゝなつた、元來君は天性豁達、加ふるに剛毅である、そして善く談するかと思へば、能く誠し、少しも忌憚しない所は、之れ又一異の人物である、其緻密であつて、事務に練整なることは、吾人の深く認むる所である、今や兄弟二人は、實業界の巨傑と推重せられて居るのは、實に名譽な譯だ。

菊地兄弟

兄、は理學博士文部大臣、貴族院議員
次、は理學博士大學教授
末弟、は理學士

菊地大麓　氏は現文部大臣である、安政二年正月廿九日江戸津山藩邸内に生れた、父、は有名な箕作秋坪と云ふ漢學者であつた、故あつて菊地の性を繼いたのである、君は其初め、舊幕の蕃書取調所へ入つて英學を修めた、此時年僅かに七才、後慶應二年丁度十二歳の時、英國に遊學し、倫敦の中學校へ入學した、君の嚴父は醫者になることを勸めたが、中學に二年許り居るうちに、數學か非常に面白くなり、殊に數學の理論の正確な所が氣に入つて、遂に今日の如き學者となつた所以である、後歸朝して大學の出仕に擧げられ、明治三年再び官費を以て英國に留學を命せられた、君は先づケンブリッチ大學に入り、五年の後ベチエラル、オヴ、アーツと云ふ學位を受けて、日本に歸つて來た、殊に大學に在る當時は、試驗毎に最高の點を得て、常に第一番の列に居つたのである、教師も君を見て、東洋の奇男子と云ふ名を與へたさうだ、十四年

三月仝大學から、マストルオヴアーツ即ち日本語に譯せば、理學博士と名くる學位を君に送つた、爾來帝國大學に教授となり、大學評議官、學士會員となり、且つ理學博士を授けられた、後本年伊藤内閣敗れて桂内閣の組織を見るや、君は忽ち文部大臣に任ぜられたのである、然して君は性質慎沈、周密で、甚だ考案的の腦力に強る、此腦髓を以て事に當つたならば、夫れ或は誤ることか少いのであらう、君が大臣となつての伎倆は日猶淺きを以て、未だ知る事が出來ないけれども、必らずや、學海の一大習弊を改刷して、俗に星亨流の積極主義たらしむることは、論を俟たぬ所である。

箕作佳吉　氏は安政四年十二月一日生れで、丁度今茲は四十六歳である、君は幼少の時から靜默を守つて、決して軀け廻る事などは好まなかつた、常に動植物園などを展觀して歩き樂みとして居つたのである、慶應元年久保田東潛と云ふ者に從つて學問をしたが、又家に在つても、蘭英などの語を習つた、後ち明治五年に大學南校に入つて普通科を修めた、君は何が深く考ふる所があつたと見えて、奮然洋行の念を起し、明

治六年二月に米國に行つて終まつた、其年四月にはコンヂクチカット州の、ハルトフォルド中學に入り、夫れからトロイ府ポクテクニック校を經て、イエール大學に飛び込み、動物科を專修し、二年半の後全科卒業し、バッチロル、オフ、フヒロソフヒーの學位を受け、十二年七月にはメリーランド州のジョンス、ホプキンス大學に入校して、更らに動物學を研究し、遂に同校の研究生に擧げられ、二百五十弗を受けた、十三年五月には全校のフエローに撰ばれ、年金五百弗を受け、十四年二月米國を去つて英國に渡航し、ケンブリッチ大學動物學教授バルフォールと云ふ人に就て、尙其眞理を極めたのである、何と其欲深なものだ、後佛國を始め、白耳義、獨逸、和蘭、墺太利、以太利の六ヶ國を遊歷して、十二月に歸朝した、歸つて來ると政府は人才を逃がさない、忽ち十四年二月文部省御用掛を仰付けられ、其十二月になつて大學の教授となり、年俸千百五圓を下賜されたのである、十六年二月には君が嘗に修業した、米國のジョンス、ホプキンス大學から、理學博士の學位を贈與された、聽かて廿年の十月になつて、

高等女學校長兼任を命せられ、其他各種の試驗委員又は取調委員となつた事が、數ふるに暇なき有樣である、此の如く君は海外に留學して居ること、殆んど九ヶ年、此間の苦心經營、蓋し筆紙に盡し難い、後ち文部省より理學博士の稱號を授與せられた、之れ實に君の苦心の結果とは云ひ、非凡の人物たるにあらざれば、何を以て今日の地位に立つことが出來樣か、決して出來ぬのである、今や兄は理學博士として、文部大臣として位人身を極め、弟たる君は又理學博士大學教授として、海外に名を博すに至つた、豈何ぞ名譽の次第と云はねばならぬのである。

巽作元八　氏は　氏は其末弟である、氏も亦兄と同じに學界に志を立てゝ專心一意苦學した結果は、遂に大學までも卒業することが出來て、理學士の稱號を得た、元來此男は近視眼であつた爲めに目的とした博物學の實地研究には不適當なるを悟つたので、今度は一番文學方面に志を注いだ、先づ第一着として西洋歷史の研究をやつて見やうと思ひ立ち、歐洲各國に遊學したのである、此學は君をして歷史學の上に、非常

の利益を得た許りでなく、佛獨英其他二三ヶ國の語にも通じた、歸朝すると直ぐに、擧げられて高等學校、高等師範學校、大學等の教授となつた今では官を罷めて、一心斯業の研究に從事されて居るとは、只々感服の外はない、君は尙ほ春秋に富む、遠からず博士となるのは、余の言を俟たざるのみでなく遠き海外に迄名聲を博するのは、豫め期して待く處だ。

中村兄弟

兄、は二六新聞記者
弟、は法學博士學習院教授

中村進午氏は越後高田藩士、中村九郎左衛門盛幸の三男である、明治三年七月を以て生れた、君は中々腦髓の確かな男で、大學に在つた時にも始終一二番の席に在り、特待生となつて居た、明治二十七年法科大學を卒業して、法學士となつた、其の時まだ二十五歳にしかならなかつたのに、早や早稲田の專門學校や東京法學院の講師となり、已れよりは年長の學生に、國際法の講義をして居つたのである、著者も氏に教授を得た一人であるから、能く君の性行は知つて居る、夫れから三年の後ちに學習院の教授に任せられたが、間もなく非職となつて英獨佛の三ヶ國に留學を命せられ、主として國際法に關する諸外國の學理と、實際を研究した後、一昨年の春歸朝を命ぜられて、再び元の學習院教授に復職したのである、思ふに政府は、君の深奥なる學理と實際を、華族子弟の頭に入れさせやうとの政略であつた、そこで近來は、法學か非常

に發達したのは事實であるか、內にも國際法は遲れて居る、從つて日本にも斯法に關する有力の學者は、殆んど皆無と云ふてもよろしい、然るに君は此必要なる學問に向つて、專心研究を重ねて居る、其一度諸校の講師となつてから、君は稀有の國際法學者たることか知られたのである、殊に君は、外國の著書や、若くは諸學者か言ふた事の無い所を、論じ盡して居る、茲が實に君の學者たる所で、又眞に君の伎倆である、故に今日では國際法と云ふたら、必らず君か手に成つた、國際公法論や、新條約論を繙て見るのである、此の如く君の實力は沒すべからずて、這回博士會の推薦により、法學博士の學位を授けられた、余輩が茲に人物として社會に紹介する、又無理は無いのである、所が其實兄

中村弼　氏も、亦一個の人物として宜しい、彼れは至つて學問は無いが又特長がある、前には文部大臣秘書官などをやつて、中々小巾を利かせた事もある、彼れは極めて世才に長して居るのみならず、決して小事に吸々せない所は、聊か英雄の氣分がある、

思ふに世才に長する者は學がない、故に弟の進午は學一點張りて、世辭などは少しも知ら無い、茲が兄弟でありながら、全く性質か反對で、從つて異種の長所を以て、社會に知られて居る、君は今官を去つて二六新報に身を投じ、社會の指働者たる、記者と云ふ面白い職務に就て居る、社內擧げて君の德を慕ひ、君の才を愛して居るのである、所で余をして疑はしむるのは、人物は系統的のものが、中村氏の叔兄に前田盛江と云ふ人があつた、之れも法學士の學位を有して、一時は令名赤間に噴々たるものであつたが、不幸の事には短命で終まつたのである、鄉國の人は中村兄弟が、此く人物となつたのを見て、氏の昔を思ひ出し、今迄活して置きたかつたと、惜んで居らるゝさうてあるが、著者も之れには同情を寄せるのだ。

坪井兄弟

兄、は理學博士大學教授
弟、は醫學博士大學長

坪井正五郎氏は現に理科大學の教授として知られて居る、元來君の長所は人類學と云ふ學問で、理學は理學でも、ちと他の學者のする處とは變つて居る、即ち文字の示す如く、人類の發達に關する、其既往現在及び未來の事實を研究するの學問である、例令は日本の人民は何れの方面から入り込んで來て、如何なる鹽梅に、如何なる活動を爲しつゝありしか、又其當時は如何なる儀式を爲し、如何なる器物を用ひしか等に至る迄、研究する學問じやから、至つて面白いのであると同時に、至つて困難なものである、凡そ人の長所は、其性質と嗜好の二つより成るものと思はれる、そこで君の性質は如何かと云へば、最も之れ等の學問に適當して居るのだ、殊に君が大學を卒業した當時から、現に今日でも、此かる學問に志ざすものが少なく又世に珍らしいので、此學と共に博士の名が、世に普く知らるゝに至つた、或時は各地に古器物や人骨

が發掘されると、さあ何時代の物か、如何な目的に用いた物か、坪井博士を煩はして、鑑定して貰ふと言ふ樣な有樣で、兎角坪井が歡待されたのである、故に日本では、人類學は坪井博士の占領物となつて終まつた、夫れも其筈で、君が斯學に熱心な事には、驚かざるを得ない、時に南洋に航し、又或時は北洋に探檢し、實に名狀すべからざる冒險と苦心を經て、目的を達して歸つて來る事がある、偖て齎らしたる材料を、大學又は其他の講堂で講すると、中々珍奇妙々、聽く者一人として感歎せざるは無き有樣である、而して近來は斯學に非常の發達を見るに至つたのは、誠に博士の偉功と云はねはならぬ、今や君の名譽は海外に傳はり、遠き文明國より、君を師とし、或は君と意見を叩かんと、我國に向つてやつて來る者がある、君は元來主腦强健であつて、能く緻密の業に堪へ、沈着で何事にも頓着せず、眼中斯學あるの外は他は一物も影しない、常に心を茲に致し、以て樂みとして居る、酒を好まず、烟草を嗜まず、恰んど無道樂の人物である、余輩は君を評して所謂社會的學者と賞揚するのである。

坪井次郎　氏は前博士の實弟で、氏も亦兄に劣らぬ人物である、大學を卒業して後、醫學博士の稱號を授けられた、現に京都大學醫科大學長の名譽職に就かれて居る、君又學才あり、學生時代には常に上席を占めて居つたさうだ、最も篤實であつて、叮寧親切、能く子弟を慈むの精神あるに至つては、何人も君を追慕せないものは、無いのである、故に學生の多くは、君の德に敬服しつゝあると云ふ話である、全躰から申すなら、君を學長としなくてもまだなるべき順序的の人が澤山ある、然るに少壯の君が、其任に當るのは何であらう、即ち君が德望に依て起る所、殊に博士は容姿秀麗で、大學教授中穂積博士と好男子を以て、評せられて居る、之れ又博士が自然の德か。

陸奥兄弟

兄、は伯爵二等領事
弟、は古川鑛業事務所監督

陸奥廣吉　伯は外交家を以て有名なりし、故陸奥宗光の遺子で、先代の宗光は維新後稀有の人物であつた、彼れの生地は和歌山であるが、其生地から遠き東京に出て來て、政海に身を投じ、國事に巾を盡したのである、彼れは幾度か大臣となり、最後に日清戰爭に際し、彼れ時の外務大臣として其局に當り、强硬手段を以て對手を壓し、遂に大偉業を奏した事は、吾人の未だ腦裡を離脱せない一事實である、日本否な世界の歴史として、陸奥の名は抹滅せざるものだ、啻に此一事のみでない、日本が歐米の諸文明國と對等の條約を締結し得て、初めて東洋の一强國一文明國と、誇ることの出來たのは、此陸奥が外務大臣時代の事績である、彼れは資性敏英、博學多才、頗る剛膽の氣風に富んで居つた、君が大臣をして居た時には、世人は髮剃大臣と綽したのを以ても、如何に彼れが手腕の利れた事を、豫測し得らるゝのである、不幸な事には、肺疾

に冒されて、三十年の八月二十四日薨じて終まつた、偖て其遺子か二人ある、兄は廣吉伯で、弟は有名なる銅山王、古川市兵衛の養子、古川潤吉である、流石は宗光の悴だけに、何れも立派な男である、伯は其初め海外漫遊を思ひ出だし、英獨佛等の諸文明國に行つて、其國の風土文物を視察し、傍ら政治法律の學を修め、大に得る所があつた、歸朝して後ち、外務省に入つて、飜譯官を奉職したが、間もなく獨逸公使館附を命せられたのである、其内に父の訃報に接したので、再び歸朝し、次で二等領事に昇進した、兎角大臣や華族の跡繼には、悧巧の者は生まれないのが原則の樣に思はるるが、陸奥許りは之に反して、或は親爺の宗光よりは、立派な人間になるかも知れないと、世評されて居る、現に外務省の役人の中でも、手腕家として最も葉振りが善いのを見ても、伯の將來を卜するに足るのである、親爺の宗光は外交ときては最も特長であつた、宗光が薨なつてからは、外相としての好人物を見受けない、否な今の大臣などが皆な揃つて掛つても、陸奥一人の智には及ば無い、決して陸奥程の政策は腦裡

に浮ばぬと、斷言して敢て余の躊躇せない所である、斯くも偉大なる人物の、後繼者たる伯は、未だ壯にして世に知られ、且つ推重せられて居るのは、何であらうか、即ち人物たる伯が後日社會を聳動し、先代よりは一層偉大なる事業を遂行し、雷名を四海に藏かすことあるを期するからである、伯が今日は夫れ發足點であつて、大偉業の奏行は到達點である、伯の前途は尙ほ遠く、且つ深く、余輩は伯が將來を、俟つに切なるものである。

古川潤吉　氏は伯の實弟で、君又大に父の宗光に似て居る所がある、父は元來奇敏であつて、先見の明に富んで居つた、又其位でなければ、最も困難の外交家などになれる筈が無い、所が君も此點に於ては、父から繼て來たと見へて、中々奇敏である、確かに銅山王の古川市兵衛が見込んで貰つたゝけの、人物に相違ない、今は古川鑛業所の監督を勤め、事務員幾千人、皆な君に望みを屬して居るのみか、主人公の市兵衛よりは、養子の方が苦勞人だ、何にもかにも話が分かると云ふて、只管彼の德を慕ふて

居るのは何か、之れ畢竟君が處するに當世の才を以てし、行ふ也能く先見の明を誤まらぬからである、殊に鑛業の事たる、最も國力を強ふする大偉業なると同時に、又一面に於ては鑛毒の害や尠少からぬものである、吾人は足尾銅山鑛毒事件の、永く今日に落着せないのを追想しても、如何に害の大なるかを知らる、此時に當つて、宜しく待つに君を以てするのである、即ち該疑問を解決して、全く紛議の根跡を斷ち、以て庶衆を安んぜしめ、一面に於ては、國家事業の奬勵を計つたならば、余は實に君を、日本否な東洋の實業家として、亞ぢざるの人物であることを、誓ふものである、君は果して之を學ふことが、出來るか何うだか。[illegible]

大久保兄弟

兄、は侯爵
次、は澳國公使
末弟、は大分縣知事

大久保利和　侯は維新の元勳者たりし、故大久保利通公の長子である、安政六年七月を以て生れた、嚴君不時の災に遭ふて、世を逝かれてからは、其家督を相續して、侯爵となり華族に列せられた、父の利通公は、維新の三傑と云はれて、大久保甲東、木戸松菊、西郷南洲は、元勳者でもあり又非凡な人物でもあつたが、其悴の利和侯は未だ人物として天下に知られ居らぬのである、然し夫れは注文が無理で、甲東の世に名聲を博したのは、幕府が亡びて明治維新となり、何事も改革せなければならぬといふ時期に會したから、人物は夫れ〳〵己れの伎倆を天下に顯はすことが出來た、中にも充分間暮當りて、途方も無い俗に申す無鐵砲のやり方が、成功した事があつた、夫れは當に政治家ばかりて無く、商界でもなんでも皆同一てあつた、現に實業界の豪傑なども、推重されて居る雨宮敬二郎を始め、澁澤でも大倉でも、安田でも高島でも、例

の無鐵砲が首尾能く當つた爲めに、今日の如くなつた、決して天才を驅つた許りて、思ふ通りに出來る譯が無い、夫れに引換へて今日は昔と大違ひ、馬鹿よりも悧巧が多い、万事万端が改まつて、文明の二字を顯はした今日であるから、何事に向つても、非常の革刷などは出來得ないのである、早く申せば、侯は誠に手腕を振ふ事の難い極惡い時節に、世を迎へた人と云はねばならぬ、殊に侯は學識あり、智望あり、膽力ある男で、明治十八年には大藏省權少書記官に任せられて、官吏の味を覺へ、後米國に差遣の命を全ふし、彼國の事情を踏査して、歸朝すると直ちに大藏省主計官に昇進したのである、此の如く官邊に多少の經歷を有した事もあるが、夫れから官を去つて再び出てず、恰んど鳴かず飛ばざるの有樣、蓋し之れ深く思ふ所があつて、然るのであらう、侯は夫れ又一個の人物たるを失はない。

牧野伸顯　氏は大久保利通の次子利和公の實弟である、故あつて牧野の姓を名乘る事となつた、父の甲東は中々風彩も立派で、辯舌も能かつた方だが、特に彼れの長所は

沈默を守ることださうだ、所が子息の牧野は、又此點に於て大に似て居るので、君を知る人は皆な此沈默に服すと云ふ話を聞て居る、其證據には、君が内務省の次官となり、茨城縣の知事となつた時にも、之れと申す仕事もせず、且又辯才を弄して、地方民や屬僚を遇した譯でも無い、毎日〳〵沈默の二字でやり通して來たのである、然るに地方民や屬僚は、皆な君に服し、君を以て非凡の人物と仰で居る、玆は全く父の甲東が性質を、其儘に繼て來たに違は無い、又一度公使となつて、濠國に行かれた時にも、前と同じ事、誠に沈默のみて、外に何とて腕を振つた事も無いのに、其國の政府は諸外國から駐在して居る公使の内で、此牧野を一等信用し、且つ人物と敬重したと云ふ話である、さすれば君は、如何あつても人物に相違無い、否な未だ君をして其敏腕を試ましむべき時期が來ないのである、而して必らず吾人に向つて甲東の子たる實を顯はすの秋あるを、豫言して憚からないのだ。

大久保利武　氏は甲東の三男で且最愛兒であつた、天性怜悧、見識に富んだ男である、

父の威光を受け一たび内務省の秘書官となつて、時の内相たりし樺山や西郷に役人の見習を敎はつた、所が案外に質が善い、才物ときて居るから、世に處するのが御上手、新聞記者や何かには受けがよかつたのが、君の世に知らるゝ根據となつたのである、著者など暫らく新聞界に關係した其當時は、常に君に世話をやかせた方で、夫れ等から君の性行を呑み込んで居る、彼れは確かに大久保利通の種だけあつて、一の特性を備へてゐる、其特性とは即ち外でもない、度量の宏大と思慮、愼重の二點である、故に何事にも落ち付きはらつて、敢て頓着せず、遠く慮り、決して輕疎に走らざる所は、年若い君には似合ぬ程である、雄辯にして沈默、秀才にして豪邁と云ふ側より見ては、父の甲東には及ばないが、前申す二點からしては、確かに甲東よりは勝つて居ると思ふ、君は其後拔擢されて、内務省の監獄局長となり、更らに榮轉して鳥取縣知事となつた、任地に在ること僅かにして、洋行を思立ち休職の身となつて、歐米漫遊を企て、文明國の風土文物を實地に調査し、新空氣に送られて歸つて來たのであ

る、君が海外歷遊は種々の方面に向つて、裨益を與へたに相違無い、後忽ち擧げられて大分縣知事となり、現に其位置に就かれて居る、就任未だ幾何もない、故に君の伎倆を顯はすことは出來ないが、知事排斥流行の今日に、何の批評だに無い所を見れば、彼れも亦中々の人物であることを知るに足るのである、何を申すにも年がまだ若く、政海を濶歩するの期が少ないので、之れと云ふ絶大の偉業を奏する譯に行かぬが、早晩人目を惹きて、第二の甲東あることを、世人に唱はしむるの時あるは、余輩の斷言する所である。

一木兄弟

兄、は文學士文部省敕參
弟、は法學博士內務省敕參大學教授

一木喜德郎氏は靜岡縣の代議士であつた、岡田良一郎の末男である、親父が親父だけに、兄弟二人を學者となし、人物としたのは、感服の外はない、元來親父の岡田は、幼少の時代から、衆童に秀て、居つた、其子息になつて見ると、又一層威らい人間となつたのである、一木は故あつて今の姓を名乘ることになつた、兄の良平氏は長男と云ふ資格で、岡田姓を名乘つて居る、一木が世に香名を賣つたのは、遂に二三年前よりの事だ、其昔大學に居る時分には、ちと溫和しくない方で、餘り勉强もしなかつたが、天性は恐るべきものさ、常に上席に在つたのである、彼れは大學を卒業してから、法學士の稱號を得たけれども、自から深く期して居つたと見へて、とんと學士の一木が世に知れなかつたのである、處が間もなく大學の敎授となり、行政法の講義を受持つた、世の斯法學者は一木と云ふ男は、如何な理窟を立てるか、如何なに學力を持つて

居る人かと、口には言はねど心の中には、百人が百人同一の考を持て居たのである、然るに彼れの講述が世に公けになつて見ると、さあ一木は學者だ、行政法の講義は一木でなけらねばならぬ、一木の說は此ふだから他の說は陳腐だと、一齊に排斥さらるる樣になつて、全く相塲が曲るつて來たのである、之れ一木の名が天下に博まり、次て彼れは法學博士となり、內務省の參與官に任せられた、此の如く世が騷くだけ、一木は實力があるかと云ふたなれば、余輩は然りと斷言するのに躊躇せないのである、彼れは先づ着眼點に付て、他の學者に一歩擢てゝ居る、殊に彼れが說く所は奇拔であつて、論旨が確である、故に反對論者には之れを破ぶることが出來ない、爲めに一木の說には首肯する所から、遂に今日の如く一木の學理を歡待することゝなつた、彼れは眞に學者として崇拜すべき人物であるが、又其性行に於ても甚だ嘉みすべき點がある、即ち彼れは沈默を守つて苟くもせず、德義を持し、謙讓敢て誇らず、孜々汲々として學事に熱中して居るのは、決して尋常人の爲し能はざる所である、余輩は又此點

に向つて深く君を推重して居るのだ。

岡田良平　氏は一木の實兄で、現に文部省の勅任參事官を奉して居る、君も又大學の出身で文學士と云ふ稱號がある、元來人は其性質に因て、好む所が違ふと同じ事で、一木と岡田は性行も異なれば長所も相反し居る、弟が法律學に志ざせば、兄は文學に志ざす點に付ても明かである、法律を修むる質は活潑で、文學を修むる方は沈着で、そして温順である、温順な質は兎角權利とか義務とか、いや何だとか理窟張る事は厭いな許りでなく、全く出來ない、夫れであるから、此兄弟は一目して性質の異つて居る事が知れるのである、そこで君は大學を卒へてから文部省の秘書官や視學官となり、今日では勅任參事官と云ふ位置迄こぎつけたのは、中々威らい人物と賞して宜しい、彼れは如何しても出世すべき性行を備へて居る、何となれば彼れは一個の才物で、長官や同僚に對する方法に、一種の魔術を持て居る、一のマグネテスム即ち磁石力で、總ての方面から引き付けると云ふ、一風變つた長所がある、夫れが證據には文部省の

役人中に、彼れを譽むる者ばかりて、悪く言ふものが無い、全躰より申すなら、未だ君をして勅參にするのは時期が早い、今少し土俵を踏ましての上て無ければ、善くないのであるのに、思はぬうちに勅參になつて終まつたのを見ても、彼れの伎倆を想像する事が出來る、而して彼れは大事を踏んて、決して輕疎にしない所などは、一層感服する、之れ彼れか日々信用を博する所以てある、今や兄弟二人、官階に上位を占むるに至つたのは、誠に名譽の次第てある。

渡邊兄弟

兄、は男爵
弟、は子爵

渡邊昇　子は前會計檢査院長として、有名な男であつた、子は中々の才物でそして手腕家である、故に兄の清は男爵だのに、君は已に子爵となつて終まつたのである、殊に今より四五年前に於ける勢力の如きに至つては、飛ぶ鳥をも落す樣であつた、二十七八年の戰役後、會計檢査上に非常の功勞があつたのは、吾人の能く了知して居る所だ、彼れは其當時、檢査院の部長をして居つた安川繁成と、衝突して、遂に可愛想にも安川は老職である、職に堪へざる者であるとして、退官を決議し、放逐して終まつたのは、果斷にも又苛刻であつた、夫れが爲め種々の方面から攻擊を受けたけれども、一向平氣にかまへ込んで、檢査院長の身分は、主權直接の御命令でなければ、左右出來ぬのである、內閣が騷ふと、誰れか如何しようと、勝手にやつて見るが宜いと言ふて、豪傑をきめ込んだには、何人でも彼れが膽の据つて居るのに、驚かぬ者は無かつた位であつた、所が彼れは世の批評などはそつち除にして、馬の耳に念佛で、自分は一生懸命になつて、伯爵になろうと運動したと云ふ話は、當路者間に風聲盛んであつたのである、すると其內に安川處分一件が議會に持上り、今や大問題が起らんとし、閣員の中にも渡邊の處置を批難する者が出來て來たので、彼れも奇敏な男故、其手は喰はぬと、忽ち辭職して終まつた、兎角彼れは多才にして英敏な人物であるから、世に投じて能く己れを全ふし得るのは、當然である而已ならず、彼れは暫し己れの兩翼を休め、期を見て天下に延ばさんとするの、大野心を抱藏して居るに相違無い、而して彼れ非凡の才物は、遂に兄清男の上に立つ樣になつたので、爲めに勝安房から、渡邊は兎角弟が勝りけり、清昇に、千秋國武なゝ云ふ、へんてこな歌を頂戴するの、止むを得ない許りである、國武兄弟迄も、引合に出されたのは、氣の毒の次第である。

渡邊清　男は天保六年の三月に生れて、舊大村藩士である、今は年も老ぼれて、頭も禿げて終まつたが、其意氣の盛んなる事は、青年輩も及ばぬ位である、推して幼年時

代が分かるのである、明治元年には東征監軍となつて、奥羽追討總督の參謀に任せられた、夫れから賞典取調御用掛、徵士民部官權判事、按察判官、民部大亟、大藏大丞、五等判事、地方會議幹事、高等法院豫備判官等に歷任したが、終まいに福島縣知事となつて、之れで官吏の仕納めをした、其揚句には俗に隱居棄場の、貴族院議員に任せられたのである、男は其昔し、判事などを勤めたゞけに、中々理窟ぽくつて、執念深くある、茲が君の長所かは知らぬが、議員中の呼物となつて居る、何でもかでも出來る丈は、理窟を以て通し、攻め得らるゝ丈は攻めて見ようと云ふ、鹽梅しきの性質を持つて居るから、毎議會には君の質問に接して政府委員や議員の多くが困らせらるゝことがある、其遣り工合の實況などは、誠に筆紙に納めかたい程愉快、然かも禿頭で白髯ぼう〳〵の背高親爺が、さも眞面目に輕き音調で、質問の矢を放つ所などは、實に滑稽然たるものである、故に議會中の名物男として、誰れ知らぬ者は無い、然し感心な事には、何でも少しづゝ知つて居る、どんな議案が提出されても、必らず男の

意見が議事錄に載る所は威らい、今や君は華族に列して、錦鷄間祗候を仰付けられ、且つ從三位勳二等を賜つた、此の經歷を以ても、彼れ又一個の人物たることを失はぬのである。

岡松兄弟

兄、は法學博士京都大學教授
弟、は工學士子爵東京大學助教授

岡松參太郎　氏は、有名なる儒者、故岡松甕谷先生の長子である、君は中々強健なる頭腦を以て居る男だ、故に君の一たび發表する所の意見は、又高尚で、深奥で、珍妙である、そこで近來は非常に博士も增加してきたが、岡松の如き腦髓を持て居るものは斷じて一人も無い、其證據には彼れが大學を始め、諸法律學校にて講義された、筆記を一讀しても直に分かるのである、如此彼れは、強健な頭を持て居る位だから、從つて万能である、兎角他の學者の樣に專門で無い、刑法でも、民法でも、國際法でも、憲法でも、何でも持て來いと云ふ主義、之れには君を知る者の一人として、驚かざるは無い、著者も君に從つて、民法の講演を受けたことがあるが、說く事奇絕快絕である、特に君は民法を以て長所として居る、君が强健な頭は、君をして殆んど萬國の法律を齟齬せしめたのである、頃日博士會の推撰に依つて、法學博士の稱號を得たが、

余輩の目から見れば、定まり切つて居る次第であると思ふ、彼れは實に。鴻儒岡松甕谷先生の子息として、恥ぢざるの人物となつた、地下に於ける先生は定めし喜んで居るであらう、君元來性謙讓であつて、人に接するや禮狀を正ふし、一見君子的の風采を備へて居る、故に猥りに人と爭ふことを好まず、時に能く談じ、能く詼するあるに至つては、又世に得難き人物である、君今や京都大學に教授となり名聲赫々たるものである、余は君の万能を敬慕する許りて無い、君の下に薰陶せらるゝ學生諸氏の將來を待ち喜ぶものである、

井上匡四郎　子は前博士の直弟である、君は故あつて文部大臣たりし、故井上毅氏の養子となり、井上姓を冒すことゝなつた、流石は井上と云ふ人物が見込を付けて、己れの養子にしたのであるから、決して外れつこの無いのは定まつて居る、君は無事大學を卒業して工學士と云ふ學位を得ると、忽ち工科大學の助教授に任せられた、以て君の學力と、官邊に望を屬せらるゝかを、推測することが出來るのである、君は性活

潑であつて、腦至て强健なることは、兄の博士を拔く位であるさうだ、今や兄弟二人大學の教授となつて、世に名譽を博するに至つたのは、實に名譽の次第である、余は君の爲めに、故井上子の爲めに、君の將來を喜ぶものである。

徳大寺兄弟

兄、は侯爵侍從長
弟、は貴族院議員豪商

徳大寺實則　侯は舊公卿で、天保十年十二月を以て生れた、侯が半生を示したなれば、先づ慶應四年に參與職となり、次で議定職や內國事務局督に補せられた、夫れから權大納言に任ぜられ、續て內廷知事、宣撫使、御前御用專務、麝香間祗候、宮內卿、明宮御用掛、華族局長官、爵位局長官等に歷任したのである、今では侍從長兼內大臣となつて、國務を全ふして居る、侯は資性至て溫良で、最も着實の人物である、故に上の御信認厚く、又民間に德望を以て充たして居る、常に忠君愛國を念するの外は、眼中何事も影じない、故に野心もなく、謀策もない、以て侯が性行の一汎を知ることが出來る、而して先の侍從長であつた三條實美公が、二十四年の二月十八日に薨くなつてからは、後を繼けて侍從長となり、今日に引續いて、其職を全ふして居るの一點に於ても、如何に侯が忠君の士であることを明かにし得らるゝと思ふ、嗚呼侯は又維

新の一人物である。

住友吉左衛門　氏は徳大寺侯の實弟である、元治元年十二月を以て生れた、君は華族の家に生れ、維新前なれば殊に公卿と云ふて、威らい者であつた、然るに平民的の性質を持つて居る所は、感心に堪へぬのである、古は知らず明治文明の今日となつては、公卿だの、華族などと、鼻を高くして居る所では無いとの考を抱かれたのは、實に明識の士と稱揚せねばならぬのである、夫れが證據には、華族は華族に嫁すと云ふ俗風を排して、商人然かも平民の養子となつて終まつた、君は早くも邦國の開明と、商工業の發達とに着眼し、一國を富まし、兵を強ふするには、商工業を奬勵しなければならぬと信じ、先づ歐米諸文明國に漫遊し、傍ら商工業を視察した、此一舉は如何に君が精神を、動かしたのであるかを推し得らるゝ、後ち關西唯一の豪商住友家の養子となつた、爾來實業界に勇飛し、警敏能く其機を誤らないのである、君は實に警敏の士たる許りで無い、資性至つて實着に、綿密周到である、加ふるに叮嚀、親切、慈愛の

心に富んで居る、故に世人は君の德を慕ふ、其今日に於て、吾人の敬重を受くる所以の者は、決して偶然でなからう、今や大坂府多額納稅者として、貴族院中の一人と知られて居る、君の名譽も又大なるものだ。

柴兄弟

兄、は前農商務次官、現に憲政本黨員
弟、は陸軍砲兵中佐功三級

柴四郎　氏は文壇に於ける錚々たる一人物として、又政治家として、普く世に知られて居る、嘗には佳人の奇遇を著はして、非常に名聲を賣つたのである、夫れ迄は柴四郎と云ふたら、餘り知れなかつたが、佳人の奇遇が東海散士たる者の手に成つたと言ふので、知らず〳〵柴の名が弘まつて來たのである、彼れは其初めに於て此く文學界の人であつたが、遂には方面を轉じて政海の人となつた、先づ大隈伯に味方し、進歩黨員となり、自由黨に抗した、後ち憲政內閣の組織を見るや、擧げられて農商務次官に一躍任ぜられたのである、所が其內に大隈內閣も瓦解して終まつたので、自然君も辭職して民間に下つた、彼れは嘗に福島縣から推擇されて代議士となり、夫れより政黨屋となつた丈けで、別に感服する程の經歷を持たなかつたのに、時の政府は早くも君を見拔いて次官に登用したのは、彼れが如何に人物であるかを豫想する事が出來る、

彼れは官階に履歷を作つたのは何でもかでも次官が始めて、他の者の樣に、屬官から高等官、高等官から敕任官に經上ると云ふ秩序的の仕方で無い、全く一躍數階段を越へた、其技倆に至つては慥かざるを得ないのである、今や世を離れし者の如く、殆んど其姿を顯はさない、之れが彼れをして益々人物たるの價値を增さしむる所で、彼れは一度び風雲に乘ぜば、必らずや大飛躍を試むる事は、余の豫言を俟たないのである、而して君の未だ期に接しないのは、即ち進歩黨所謂憲政本黨、極言せば大隈親分の政海を泳出て〳〵、內閣を乘取らざるに原由するものである、故に若し親分が內閣の人たる曉には、君も又大臣或は總務長官、其他の樞要なる地位に就て、手腕を振ふに至るのは、必然である、氣の毒な事には現情伯をして、勇躍せしむる時がない許りで無い、寧ろ伯の率ひて居る進歩黨の昨今は、見る影もなき失意時代に會して居る、從つて君の今日も思ひやらるゝ、然しながら游閑內閣や元勳內閣の下に、働かんと欲する根本的、役人思想ある者はいざ知らず、政黨內閣を組織し憲政政治を擧げんと欲す

る者は、那邊の事實に遭遇する事は、豫め覺悟せねばならぬのである、君果して然るや否やは、敢て余の言を俟たずとも、知れきつて居る。

柴五郎氏は身を軍籍に投じ、現に砲兵中佐となつて居る、苟くも清國の戰亂を追想する者は君の名を知るであらう、昨年清國の未開黨が、世界各文明國を相手として、戰爭を試みるや、彼れ等は各國の公使を始め、館員が其地に駐在するを機とし、國際法を無視して之に砲敵し、一擧に慘殺しやうとした、此時各國の公使教徒を始め、國に移住せし者は、逃れて日本公使館に來たのである、彼等は之を見て益々發砲を力めたので、館員一同は其誰れ彼れを問はず、銃砲を手にし、防禦を盡したが、當時の情況は實に吾人をして、心膽を寒からしめた事は今に我々の能く記憶に存じて居る所だ、然れども館員一同は、畢生の力を以て能く之れが防禦に堪へた、其内我兵が北京城に浸入し、辛ふじて公使以下諸外國人の生命を助くることが出來た、世が開けて、以來、こんな戰ひはなかつたと同時に、日本が世界の局面に向つて、功名を博したのは、實に偉大の歷史として、万古に朽ちないのである、所が君は戰爭以前から、公使館附武官となつて、西公使に隨ひ、北京に奉職して居つた、計らずも此の事變に遭遇して、一方ならぬ苦心經營を重ねたのである、殊に中佐は館の内外に於て、防禦の指揮を取締つたが、全く其功を奏するを得て、殆んど死傷者も無かつたのは、一に君の力である、日本兵の入城以來、戰爭が無くなると、君又軍務に狂奔し、警務を謀つた爲めに、諸外國人の生命財産を無事に確保する事が出來た、之れより後各國兵續て北京に入り、當時の情況を聞て、柴中佐を歡迎する事一方ならず、遂には之れが日本を始め、各國の新聞に掲載せられ、中佐の功を賞揚したのである、特に君の名譽として朽ちないのは、此戰役に關係せし歐洲各文明國では、此度の事件に最も功勞あつた者に、黄金の賞標を與ふる事に決議した、處が遂に第一の功勞者は、柴中佐と決して、名譽の金標は君の手に落ちたのである、之れ實に小にしては柴一族の榮譽であつて、大にしては日本帝國の、海外に誇るべき事柄である、後ち歸朝の命に接し、青木中佐

に代つて、清國を引上げ凱旋した、其東京に歸着すると、市民は擧つて、君の功を賞揚して措かなかつた、間もなく參謀本部第五部員に任命せられ、次で功一級を進められ、金鵄勳章功三級となつたのである、嗚呼君が絶大なる偉業は此事實と共に、千古に磨滅せざる次第である。

矢野兄弟

兄、は前公使、現に宮内官
弟、は代議士

矢野文雄　氏は九州大分佐伯藩の出身である、代々毛利氏の家臣であつた、君の半生は演説家となり、新聞記者となり、官吏となり、政黨員となり、中々複雜なものである、御維新後民部官となつたのが开も官に就た初めで、夫れから葛飾縣知事、大參事權知事等に歷任したが、明治二十三年には式部官に累進されたのである、彼れは幼年時代より書を好んで、傍ら武藝などを修めた、殊に書を讀む中にも、最も諸葛孔明を欽慕したさうだ、十五歳の頃宋名臣言行錄と云ふものを讀んで、韓魏公の人物を敬慕した、常に垂紳正笏不動聲氣而置天下于泰山之安の語を誦した、即ち君が容儀を修飾するの風は此等の書から學ばれたものだと云ふ話である、明治二年に慶應義塾に入つて、英學を修め後士として政治經濟の學を研究した、之れから君の名が少しく世に知られて來た、明治十一年に舊師福澤氏の紹介を以て、大藏卿の大隈に知交を求め、茲

に初めて大藏省の小役人となつたのである、夫れより段々昇級して、檢査官に任ぜられたが、其内に内閣の變動が起つて、明治十四年の十月大隈の退職と同時に、官を罷めて終まひ、今度は更らに新聞記者と商賣換をした、折しも改進黨が組織されたものだから忽ち之に加入し大に黨の爲めに盡力した、明治十八年に歐米各國を周遊しやうと決心したが、錢が無いので經國美談と云ふ書物を著して、之れにて數万圓の收益を得たのである、君は思ひ掛け無い福の神に際會し、直ちに外國に出發した、日本に書物を著はして洋行した者は、君を以て嚆矢とする、翌年歸朝し、再び報知新聞に從事し、紙面に一大改革を施こし歐米の新空氣を讀者に紹介した、二十二年に至つて大隈が外務大臣となり、條約改正に力を盡した時、君は參謀となつて畢生の力を振つたが、墓なくも社會の批難が多いので、大隈も目的を遂げ無いで退官した、偶々來島常喜が大隈に爆烈彈を拋げ付けて、片足を剝いだのも、此當時であつた、爾後政界を離れて世を忘れた如く殆んど顔見せもしなかつた、夫れから二十三年には伊侯の推薦にて宮

内官吏に任ぜられた、之れが君の半生の經歷中重もなるものである、而して彼れは其性沈重高雅で、其態度は實に温恭である、故に人に接するのにも決して貴賤貧富の別を問はぬ、殊に能く子弟を訓諭し、又善く人の急を救ふの精神に至つては、余輩の信服する所以である、彼れは眞に人物として世に崇敬せられた、偖て其弟は何うであらうか。

小栗貞雄　氏は矢野博士の令弟である、矢野氏父祖三世が德を積みしために、鄕黨は擧げて推服した、父は光儀と云ひ君は其第四子であつた、幼少の時父に從つて東上し、慶應義塾に入學した、處が思の外記憶の良い男であるから、忽ち優等生となり、學級を超進されたことが度々であつた、後舊大學豫備門に入つたが、其餘暇には時事問題を評論した、すると學生の政談演說は、嚴禁すると云ふので、學監より注意を受けると、君は之を聞て憤慨の餘り、其非を鳴らし退校して終まつたのは、實に意氣揚々たるものである、是れから後、君は學術又は政談演說を各地に試みた、明治十三四年の

頃になると、世の人が漸く辯論演說の必要を感じて來たので、爲めに結社が大に勃興されたのである、君は即ち同志と謀つて、明治會堂（今の厚生館）に毎週政談演說會を開いた、明治十四年に改進黨の組織せらるゝや、君は議政會員と共に之に入つて、盛に進歩主義を唱道し、其傍ら英學の教師となつて、青年の教育に從事したのである、十九年に至り、報知新聞の記者となり、約三年間執筆となつて居つたが、二十一年の春歐米漫遊を試みた、爲めに彼れは社會的觀宗に向つて、大に得たる所があつた、二十五年に實業社會に入つて、東京石油株式會社の取締役となり、次で扇橋製藥株式會社を設立し、工業用藥品の製造に苦心したのである、軈て明治三十一年の八月、大分縣第二區から大多數を以て選ばれて、代議士となつた、俗海を横渉した經歴に至つては、實に少なく無い、而して君を簡短に評するなれば、容儀秀麗、擧止閑雅である、人に接するに及んでや、一見舊識の如きものだ、能く論辯するけれども、曾て粗豪の態を見はさぬのである、彼れは殊に常識の發達して思量家である、其能く大躰に

通ずると共に、緻密な腦を有して、細事と雖も苟くもせぬと云ふのは、實に君の長所だ、余輩は君を九州の一人物と賞揚して、敢て躊躇せない所以の者は爰に存する譯だ。

井上兄弟

兄、は獨逸公使
弟、は式部官

井上勝之助氏は現に獨逸公使として、其地に赴任されて居る、君は伊藤侯の幕下で、多くは伊藤の鑑識に依つて、此く出世した、偖て侯の才物である事は三才の童子も知つて居るが、其才物の鑑識に依る、言を換ゆれば侯の寵遇を受けるに至つた君は、又尋常の人間で無い事が直ぐ分かるのである、彼れは侯が内閣を組織するの秋は、又君が樞要の地位に在るのを見ても、侯は餘程に氣に入つて居るに相違無い、君は元來警眼な男で、所謂當世の才物である、故に一朝事あると、必らず一の畫策を侯に參し、そして侯の意見に資すると云ふ話である、侯の君を遇するのは當然の次第と云はねばならぬ、彼れ伊侯の野に投ずると共に、身を公使に驅りて遠く獨逸の新風雲に吹かれて居る、若し期至らば歸朝して、内閣を乘取るの決心は、敢てX光線を用いずとも、能く見い幻つるのである、思へば彼れ又一個の人物。

伊藤勇吉氏は侯爵大勳位伊藤博文の養子である、伊藤には娘の外男子は無い、所で、前井上勝之助の弟を、貰ひ受けて養子とした、之れが即ち式部官從五位伊藤勇吉氏である、君は何も慾く可き程の人物でも無い、實は父侯爵の光りて、君も光りを放つのである、然し今の華族の子息と云ふ者は、馬鹿が原則で、悧巧が例外とは、今更茲に馬鹿者の例を擧げずとも、能く解つて居る、然るに君の如きは全く華族たるの本職を盡し、宮内官吏として其責務を全して居るに至つては、聊か賞賛の辭を呈せねばならぬのだ、殊に君は、英獨佛の三ケ國語に通じ、奇妙に外國人と、會話を交ゆる事が出來る、故に若し外國の貴顯や皇族が、日本にやつて來て、日本皇室と相交會する折りには、好男子の好年輩の君が、通譯をする、遂此間も清國戰爭事件の總指揮官であつた、ロバーアト元帥が日本に來られ、入京したる折り、我　天皇陛下に拜謁を仰せ付けられ、退城後は市中の名所古蹟を見物された事がある、其當時も君は譯官となり、接待係となつて、遇するので、君は思ひの外、外國人に褒めるものが多くなつたのも、

結局は茲である、偖て君の現在は分りたが、將來は如何であらう、人物の君は父博文の後を繼けて、日本否な東洋の大人物大政治家と爲り得らるゝであらうかは、余の豫言外である。

中澤兄弟

兄、は八十四、京橋銀行頭取
弟、は酒類仲買商

中澤彦吉　氏は近時の實業家として知られて居る、君は元來其性行に於て、篤實な男である、故に彼れは世の德望を受けて居る、丁度十八歲の時であつたが、熱陽土井翁の門に入り、漢籍を修めた、偶々友人の一人が醫學を志ざし、蘭學を修めんと欲して、長崎に赴かうとした、君は直ちに詩を賦つて之を送つたさうだ、今參考迄に其詩を茲に示すに。

起生回生誰能必。專心往學和蘭術。世人可談君英才。窮理神功掌中在。

と云ふのであつた、弱年の君が、即坐に此巧韵をやつた其敏腕には、讀む人每に驚かぬものは無かつたさうだ、又嘗て小雷公を師として居つた當時の如きは、實に奇敏な男であつた事が分かるのである、抑々小雷公の創てた學舍は、會則が極めて嚴重であつたが、何分にもいたづら盛りの、少年の群りであるから、到底會則を守るなどゝ云

ふことは、出來ないのである、或時は同窓五六十人が、戯れに筆や帽子を以て賭博をした、處が先生之を見付けたものだて、一同は夫れ〳〵匿れて終まつた、折悪くも君は捕へられて鞭を以て撻たれた揚句には、其相手の名を白狀せよと責められたが、君は唯默然つて居つて、一言もしない、先生君を見て愈々憤り、叱咤鞭撻することが數回であつたけれども、如何しても言はないので、遂に相手が知れずになつて終まつた、此時先生の雷公は、君を顧みて、少年にも似合は無い義俠心のある男であると、賞賛して、己れの室に歸つたが、彼に連累の多くが之を聞て、互に喜ぶこと限りなかつたが、兎に角其意を謝すると云ふて、各自が半紙一帖を醵集して君に贈つたさうだ、之れから後多くの望みを得て、常に君を俟つて万事を爲したと云ふ話である、軈がて十九歳の時、君は金五兩を懐ろにして諸國漫遊を企て、とふ〳〵伊勢の津に行つて、土井有恪翁の門人となつた、暫らくの間勉強して居つたが、突然東京の實家から書面に接したのである、其書面には家兄放蕩無頼の行爲あり、父君嚴責して之を逐ふ、

汝速かに歸つて家業に就け云々、とあつたので、止むなく翁の門を去つて、東京に歸り、家業を助けた、元來君の家は代々酒屋であるが、當時は日本も開明になる初めであつて、諸外國人が入り込んで來る有樣であつたものだから、君は此時に乘じて、何か一金儲けをして見やうと、横濱に行つたが、思案の末は貿易業を營むことゝなつた、先づ駿河、遠江、三河路に行つて、綿花を買入れ、之れを横濱に持ち運んで、外國人に賣り付け、非常の利益を占めたのである、折りしも幕府が顚覆の樣子を見て、君は此時に勉強して置かなかつたならば、後ちに至つて臍を噛むとも、間に合は無い事が出來ると決心して、箕作氏の門に入り、後慶應義塾に入學した、塾長の福澤先生は君に向て曰ふのに、吾れには弟子は少なく無いが、多くは士である、商人で洋學を修めやうとするのは、士の弟子を十人を得たるよりも喜ばしい事である、と語られたさうだ、君が今日あるのは、實に昔日の苦心經營を爲した結果である、後ち明治二年に、三野村や小野等と商社を起し、尋て東京府補助の下に開墾會社なるものを設け、

君は其頭取に擧げられた、之れより君の名聲が世に傳はつた、續て蓙糸賣込問屋を創め、奥信地方の蓙糸紙荷爲替業を横濱に開いた、之れが日本で荷爲替なるものゝ興つた嚆矢である、二十三年には八十四國立銀行の頭取となり、傍ら世襲の酒類營業の外に、醬油問屋、西洋酒類販賣を爲し、家道を殷賑した、以上は君が半生を示したものである、君や商機を見る事に敏で、殊に篤實正確の性行を以て居る、其現に實業海の豪估と云はれ、進んでは市民が之を政海に迄持出さしめやうとするのを見ても、其德望と其實力を證明し得らるゝのである。

中澤彦七　氏は其直弟て、之れ又實業界に名を賣つて居る、嘗には東京市府の名譽職に擧げられた事もある、君は兄程は世に深く推重されて居らぬが、未だ君が伎倆を示すべき時期が來ないから、止むを得んので、敢て此一點を以て兄との人物を上下する事は出來ぬのだ、そこて君の家は代々酒類の仲買を以て業とした、故に君も又兄と同じく、京橋松川町九番地に店舗を設けて、家業を勤め傍ら日本鐵道會社を始め、其

有數なる會社の重役となつて居る、元來君の性行として、至つて溫厚篤實の君子で、寧ろ商人には不向と云ふても宜しい、處が此點が君の長所で、却て世の信用を得たのである、商人の信用は結局金である、敢て現金を用ゐずとも、信用さへあれば仕事が出來る、獨力や資力を以て、能く今日の如き立派の實業家となる事を得たのである、今や都人は君を擧げて、市商人の代表者たらしめんと、しつゝあるのである、其人物たること、何人も疑は無い。

久米兄弟

兄、は法學士遞信省の敕任參事官
弟、は理學士第五高等學校敎諭
末弟、は醫科大學生

久米金彌　氏は現に遞信省の敕任參事官である、其幼少の時代より學才衆に秀でゝ居つた、大學を卒業して、法學士の學位を得ると、忽ち官階に飛び込んで終まつたのである、殊に君は當世の才物とさへ云はるゝ位の男だから、上官に對する手段方法には拔目が無い、兎角する內に、內務省の社寺局長と昇進した、夫れより世に、久米金彌ある事が知られて來たのである、彼れは內閣の變動と共に遞信省に轉任し、通信局長となつたが、一度政黨內閣風が吹いて來たので、止むなく辭職して民間の人となつた、然し夫れは無理が無いので、彼れは山縣や西鄕、松方、大隈など云ふ藩閥內閣から取り上げられた、全くの役人的經歷と、根性を備へて居る故である、計らずも政友會內閣も瓦解して、桂內閣の組織を見るの今日となつた、此際君は到底野に居ることは、出來ないのみならず、有爲の人物を遊ばせて置くのは、國の爲めに望まざる所

である、彼れは再び遞信省に入つて、敕任參事官となつたのである、而して彼れが昇進は比較的に迅速である、是れ眞に君が天才と、實力の存する所以と云はねばならぬ、彼れは又一個の人物たるに恥ぢない、然るに珍らしき事には、其弟○

久米恒松　氏も亦人物である、君は理科大學を卒業して、理學士と云ふ學位を得た、今は熊本の高等學校に敎諭を勤めて居る、其性行に至つては聊か兄の金彌とは違ふて居る所がある、兄は法學士と云ふ肩書を持ち、弟は之に反し、理學士と云ふ資格を得る點から見ても、必らず性質が異つて居るに相違無いのである、殊に君は性溫良、親切叮嚀である、故に敎諭連中でも、評判が一等宜ろしい許りで無い、却て校長の櫻井房記よりか、君を尊敬し君の德を慕ふ者が多い、茲が君の人物たり、又た長所たる所で、兄の金彌が才物たる長所相反立して、世に知らるゝ所となつたのである、而して君未だ年三十を越へず前途大に有爲である、余は君の將來を窃かに俟ちつゝ居るのだ。

久米駒吉　氏は恒松氏の直弟で、現に醫科大學に通學して居る、彼れ神經最も過敏であつて、事を氣にする男である、故に余は君が、絶大なる事業の成功を見るや否やは、敢て保證しないが、兎に角神經が過敏だけに、記憶力には長じて居る、其一たび見聞したることは、決して忘れぬと云ふ點よりしても、彼れ又常人にあらざることが知れる、彼れは大學にあつて常に上席を占め、特に優待生となつて居る、彼れは遠からず醫學士の稱號を得て、社會に出づるのである、去りながら一段世に出た上は、全く才を應用するのでなくて、實力即ち手術を以て名を博するのに相違ない、思ふに兄弟三人が學士の稱號を得て、社會に名を知らるゝと云ふに至つたならば、實に名譽の話である。

伊東兄弟

兄、は男爵前農務商大弟、は農商務特許局審査官

伊東巳代治　男は明治維新の才物として知られて居る、彼れは之れと云ふ程の學問もなく、又別に感服すべき偉業も遂げざるに、身は男爵となり、華族に列せらるゝの榮を得たるが如きは、吾人をして意外の才物と評さればならぬのである、彼は其初め小役人たらんと欲してか、電信術を學んだ事がある、後英學を修め、稍々上達してから通辯人となり、更らに屬官となり、書記官となり、書記官長となり、官邊に在ること二十有餘年、伊侯の寵遇に依つて、侯が大にの樞機に與かり、時に侯の背後に立て百官の進退を自在し得るの中心點となつたのである、君が此當時は恰かも支那に於ける宦官を想聯せしむる次第であつた、此の如く伊侯の勢力を肩にして、官海を躍り廻り廿七八年の日清戰爭起り、媾和の批准交換を爲すの期に際し、君は大使として清國に赴き、無事重任を全ふしたるのみか、其地に駐在せる諸各國の將校や、公使が相並ん

て我強國を妬み、一行を妨害し、甚だしきに至りては威力以て、强迫的の動作を與へた程であつたにも拘らず、君は毫も恐るゝ所なく、泰然自若其任を果たして歸朝した、此一事は誠に日本帝國の光りを、世界に輝かしたと同時に、個人としての伊東の人物を、天下に轟かしたのである、彼れ能く伊侯の鑑職中に入り、遂に引立てられて今日の光榮を得たるに至つては、彼れが如何に才鋒あり穎脫する所あるやを、想像する事が出來る、殊に彼れは精力過絕であるから、能く繁劇に堪ゆるのである、其官にあるや政務の調査最も綿密で、屢々下僚を困らしめたことがあると云ふ點に付ても、一般を知るに充分で在る、余は人物としての彼れの半生は必らず他と相違する所があると、信ずるものである。

伊東祐業　氏は巳代治男の令弟と聞て居る、兄が一たび農商務大臣になると、君は忽ち引會に出された、折りしも同省に屬官を奉職して居つたので、例の新聞記者は之を評して、兄は大臣、弟は屬官とは、餘り上下のへだたがある、同じ兄弟で、かふも智

能に相違があるものかなどと、悪口を云はれたが、然し夫れは無理な話、兄が出世して弟が其の下にあるのは、まだしものこと、弟が立派な地位に立つて、兄が何の役にも立たぬのは、却つて世の笑を受けるてはないか、夫れを思へば此の兄弟は威らいもの、殊に人の出世は、一に智能の發達如何に因る許りでなく、多くは時運の然らしむる所だ、伊東が大臣になつたのも、天才も天才だが、其時の好運にブツ付かつて、アンナ地位を得たのである、并は偖て置き、此人物を評したならば、性行は至つて實直で、周到である、兄の樣に天才もなければ、從つて謀略にも富まない、夫れがために男の如き地位を得られなかつた、然し彼は比較的に理論思想を持つて居るから、總てが正確で、決して事を誤まる事は少ない、處が兄の巳代治は謀略只一天張、眞の長所を以て出世したが、又此れか甚だしき短所となつて、常に世の忌避を受けて居るのだ、さすれば强ち兄の方ばかりが勝つて居るといふ譯には行かない、兎に角彼れは屬官より、一躍して高等官となり、特許局審査官の肩書を得たのは、先づ非凡の處があるか

らである、今や兄は華族となり、弟は相當の官に就て居るのは、誠に名譽の外はない。

穂積兄弟

兄、は法學博士バリストル大學教授
弟、は法學博士文學士大學教授

穂積陳重　氏は東京の人で、世々伊豫宇和島藩に仕へた、祖父は諱を重麿と云ひ、國學者であつた、君は安政二年七月生れて、幼少の時より秀穎奇拔な男であつた、其初め藩立の明倫館に入つて漢學を修めた、元來一を聞て十を知ると云ふ人物であつたから、忽ち特進して、全館の給養生長に擧けられたのである、後間もなく上京して開成學校に入り、法律を修めた、すると政府では君が人物を見拔て、英國に留學を命じて呉れた、十二年にバリストルの學位を取り、其年四月に伯林大學に入つて法理學を修め、十四年六月に歸朝したのである、君が嘗に英國遊學中であつたが、偶々瑞士國に於て英國公法會議を開かれた事がある、此時君は我英國駐在の森公使に隨行して、其會議に臨んだ、會議中、君は、突如演壇に上つて、大聲一番、治外法權の弊害を演說して、滿場の大喝采を得た事があるさうだ、爲めに日本には、驚くべき學者がある

と云ふ事を、會議員の一同は、土產として國に歸つて、告げられたと見へて、各地の新聞雜誌に、穗積の名が顯はれたのである、歸朝後は大學敎授となり、次て敎頭や評議官に任せられた、然し君は至つて謙讓な性質で、人に接するに懇懃温容である、故に嘗に議評官や、貴族院議員に勅撰された事があるが、皆な辭表を提出して終まつたのである、思ふに今日は、競爭互に血を見るも、猶議員たらんとするの實狀に引換へて、君の如き人あるのは、嘗に當世學者流に卓出する許りでない、深く君の性行を世の龜鑑とせねばならぬのである。

穗積八束　氏は陳重氏の實弟で、兄を貧かす位の人物である、兄弟打ち揃ふて、法學博士となり、世の推重を受くるのは、實に名譽の話さ、そこで君の經歷を一言するに、文久元年三月宇和島仲町に生れ、明治七年に父母と共に東京に上り、共立學校に入學したが、間もなく外國語學校に入つて、夫れから大學に轉じたのである、明治十六年七月には、東京大學を卒業して、文學士の學位を得た、其大學に在る時には、學術他

に秀でゝ居つたので、十八年に公法及び制度歷史修業を命ぜられて、獨逸に留學した、彼國に着くと、先づバイデルヘルク府の伯林大學や、ストラスブルクの大學に入つて研究し、更らに倫敦に行き、スエッチエル、ゼネラル等の諸大學を歷遊して、二十二年に歸朝した、時恰かも憲法發布の一週間前であつた、國民は擧げて、時事問題に熱中して居た最中に、公法學者の穗積が、外國の新學理新空氣を吸收して歸つて來たと云ふので、君を歡迎し無いものはなかつた、忽ち大學の敎授となり、樞密院の書記官となり、傍ら憲法上に於ける我國及び諸外國の法理を、天下に明かにしたのである、すると誠に明論卓說で、我憲法の眞理を明かにして、遺憾なき有樣であつたものだから、君の名は一層世に高まつて來た、何でも憲法の講義は、穗積博士でなければならぬと云ふことになつて終まつたのは道理、間もなく法科大學長となり、且つ貴族院議員に敕撰されたのである、君は實に容姿秀麗で、貴公子の風采を備へて居る、然かも大學卒業の後、兒童と席を同くして、語學校に學んだ如きは、其心事の卓落で、其

不羈なることは、誠に欽すべき次第である。

幸田兄弟

兄、は海軍大尉
弟、は小説家其末弟、は文學士

幸田成行　氏は明治文壇の偉人である、日本小説家の二傑と云はれる、尾崎紅葉と君である、君は慶應三年の七月、神田の新屋敷と申す所にて生れた、幼少の頃から學才衆に勝つて居つた、丁度六才の頃、關雲江と云ふ儒者の姉に當る、お千代といふ方に就て、手習を始めた、其傍ら下谷徒士町の會田某に從ひ、漢學の素讀を修めたのである、九歳の比ひ、師範學校附屬小學校に入學した、當時は頭りに學校で、拔擢といふことが流行し、他生徒より常に學力優等と見る時は、拔いて進級させるのである、君は思ふのに、何とかして他生徒を乘越して、上級に飛込まうと非常に勉強した結果は、どし〳〵進級されて、十三歳に至つて小學全科を卒業したのである、君は十一才の時分から、草双紙などを讀むことを嗜み、夫れより兒雷也物語や、白縫物語、田舍源氏などを讀む樣になつた、所が中々面白いので、終ひにはかふ云ふ書物を讀むことに凝つ

たのである、之れが即ち君をして文學壇の人たらしめたる所以さ、小學卒業後約一年を經て、中學校に入つたが、中途にして廢めて終まひ、更らに英學を修め、傍ら菊地松軒に就て漢學を學んだ、然し暇さへあれば、例の小説やなにかを讀んで居つて、手に離した事が無かつた、君は讀む毎に、如何して此な文章が作れるかと、感心しつゝ、何卒自分も一つ此かる小説を作つて、世を驚かしてやらうと、決心した、此時已に二十一歳であつた、其初めて露團々と云ふ小説を著はした、自分は左程能く出來たとは思はなかつたが、案外上出來であつたものだから、世評嘖々たる有樣であつた、君は之を見て、猶一層苦心經營する所あれば、文壇の人となることはいと易いと、夫れより專心其の業に凝り、次で風流佛、五重塔などゝ申すものを作り上げたが、何れも幽妙の傑作であつたので、君の名聲一時に傳はり露伴の小説で無ければ、面白くない、價値が無いと稱ふる姿になつたのである、彼れが多年の經驗は、遂に今日の如き大家と、稱揚せらるゝ樣になつた、君性行や至つて着實、高尚優美の氣象に富んで居る、殊に其緻密であつて、深慮の精神を以て特長と知らるゝ、故に如何なる事になし、如何なる物に會するも、一々其眞底を解得して、敢て疎放せざるに至つては、感服の外無いのである、君が今日ある又決して偶然では無い。

郡司成忠　氏は露伴の實兄で、海軍大學の出身である、君が大尉となつてから、我國北部の海防に目を注いで居つた、嘗て北海道千島地方に航して、實地の探險を試み、大に悟る所があつた、そこで忽ち海軍現役を辭して、弘く同志を募集し、且つ報効義會なる者を組織して、一行は千島に行つた、夫れから毎日の如く、露領に接近する部分迄、探險に出懸け、時に魚獵や海獸の捕獲を營み、傍ら其地の開拓を力め、以て日を送つて居つた、軈がて冬期になると、地形上より見ても北端であるから、酷寒に堪へられぬのである、然れども一行は、能く其寒さと不自由とに打ち勝ち、最初の目的を全ふした、或時は一行中凍死をする者があり、又遠海に乘り出し途中暴風に遭ふた結果は、無慘にも魚類の腹中に葬むられたものが有つた、然れども君は、決して之を

意とせずし、活き殘りたる部下を督して、素志を貫して居る、吾人は君が行を見て、眞に名實相背かざることを、賞贊して止まざる者である、今や東洋の風雲盛んに、日を追ふて多端となり、特に北面の防禦は必要を感じつゝあるの秋である、此時に於ける君の功や、實に大なると同時に、業又偉大なるものである。

幸田成友　氏は露伴の弟である、嘗に優等を以て、高等學校の門を終へると、直ぐに文科大學に入つた、元來此兄弟は、兄の露伴を始め何れも學問の質が良い、入る早々學力衆に擢でるといふ鹽梅式、生徒中から羨みを受けた位であつたとは、先づ何よりの事さ、後ち學を卒へて文學士の稱號を貰つた、さあ今後は世渡りの學問、書見許りでは、中々經世の道を知ることは出來ない、そこで彼は先づ文學士の肩書で、市中の新聞や雜誌に、自己の所見を述べ、又或時は小說などを書いて、名を賣り始めた、之れから世間では、幸田を知る樣になつたのである、すると間もなく君に、學校の敎師になつたら、如何かと勸めるものがあつた、彼れは幸ひと某の周旋で、ある高等學

校の敎諭に任ぜられた、之れて君が一個の人物として、世間の歡迎を受けた、何を云ふにも二人の兄が、名聲を博して居る矢先に、末弟の君が文學士の肩書を持たので、今は却て君に望を屬したのである、而して猶春秋に富んで居る、君が將來は推して知ることが出來る。

此外露伴に、二人の妹がある、名は延子と云ひ、幸子といひ、賢名淑德を以て世に知られ居る、延子孃は嘗に東京音樂學校を卒業して、海外迄も研究に出懸けて、今までは女流第一の音樂家である其學校にあつた時分にも、學術優等で、學校が創立されて以來、第一優等の生徒として、摸範となつて居るさうである、

有賀兄弟

兄、は法學博士文學士
弟、は法學士

有賀長雄　氏は大學の出身で、文學士法學博士といふ立派な學位を持つて居る、君は最も國法學の長所を以て知られて居るのみか、曩には明治法律學校の講師として、國法學の講義を擔任されたが、其當時は有名な穂積博士（八束）なども洋行中であつたので、一時は此學問が有賀の占有となつて居た樣な有樣、在都の學生などは、どれもこれも有賀の所說を謹聽し、且つ崇拜したのである、之を以ても當時の君が勢力如何を知ることが出來る、其後日淸戰爭が起ると、君は政府の法律顧問となつて、國際上の問題を解決した許りでなく、他の方面に於ては、日淸戰役國際論なる著を公にして、世を益したことが尠くないのだ、今は陸軍大學校を始め二三の官立學校に囑托講師となり、斯學の敎授に餘念がない、所が博士が說く處は、他の學士と違ふて、一種異樣の學理より立論するので、到底想像し得られない奇說を吹く、偖て其奇說が何時も實

際に箝當するのは、只々敬服せなければならぬのだ、近くは廿七八年に於ける、威海衞の戰爭などに付ても、其前後の國際關係の、最も當を得たのは何であらうか、即ち博士等が意見の結果である、戰時國際法の文明的新實例を、萬國に紹介した日本帝國の輝りは、抑も博士が手腕の成績として、千古の史上に朽ちない所である。

有賀長文　氏は長雄氏の令弟である、兄弟揃ひも揃つて、法學博士や法學士といふ學位を持つて居るのは、誠に名譽の次第である、其上君は中々敏腕家の評判を取つて、上官に對する俗に受が良い處より、遂には貴族院書記官から農商務の參事官を經て、農工務局長とまでも漕付けた手腕さ加減は、トント驚くの外はないのである、殊に君が昨今は血氣盛りて、將來に向つて實に多望な人物として、世の歡迎を受けて居るのだ。

偖て學者としての有賀兄弟は、既に世の定論があるから、余は敢て說くの必要がないが、只此兄弟が性行に就て評して見るなれば、兄の長雄は最も沈着に且達識である、

何をするにも極く緻密に、そして順序的にやつて行く、てあるから博士の爲す所は、決して大體に於て誤謬がない、處が弟の長文も兄に似て居る點が多く、或る一の問題を解決しないうちは、他の事に取り懸らぬといふ主義、寧ろ堅忍と云はふか、剛情と評しやうか、兎も角彼れは確かに成功力に富て居る工合は威らいものだ、して此兄弟の容貌の似て居る處は丁度西瓜を二つに割つた樣である。

櫻井兄弟

兄、は理學士第五高等學校長
弟、は工學博士豫備海軍造船大監
末弟、は理學博士理科大學教授

櫻井房記　氏は大學出身の人物である、理學士と云ふ稱號を得てから、熊本に行つて等五高等學校の教授となり、段々經上つて教頭より校長と昇進し、現に其職を奉して居る、余は未だ逢うた事は無いから、其如何なる人物であるかを確言する事は出來ぬが、君と懇親な者の話に依れば、事務家としては最も適任であるとか、中々沈默で温厚の代りには、女嗜じやそうだ、然し之れと申す程の批難攻擊も受けず、兎に角一校の長となつて、手腕を振つて居るのは、一抑々又人物と云はねばならぬのである、所が其弟は

櫻井省三　氏と云て、明治十年に海軍省より佛國留學を命ぜられたが、十四年に歸朝して後同省に勤務し、二十年には再び英佛の兩國へ差遣され、そして軍艦千代田及び千島艦監督の任務に當つたことがある、其後日清戰爭が起ると、呉鎮守府の造船廠造船

及造機科長に擧られたが、戰か濟と時の政府は一層海軍の大計畫を實施する譯で、先第一着に注文の軍艦千歳、笠置號の監督官として、君を米國に派遣されたのである、後三十二年に歸朝すると、海軍大學校の教官に任せられたが、其當時は教授連中でも非常の人望を受た、續て三十三年の五月に、豫備に編入されると、其翌月浦賀船渠株式會社の招聘に應じて、同社の本工場所長となつた、三十四年には工學博士の學位を授與されたのである、今は豫備海軍造船大監といふ肩書の外に、弘く世の推重を受て居る。

櫻井錠二　氏は理學博士と云ふ肩書を有して居る、余は未だ君を知らざれは、猥りに其性行を評論し無いが、單に其學位を以て、其地位と人物とを證する事が出來得らるゝのである、君は現に帝國大學理科大學の教授として、名聲盛んなものだ、余は頃日某理學博士を訪ふて君の性行を問ふて見た、所が先づ其長所として、腦の强健、思想の緻密、能く事に堪ゆるの點を以てせられた、而して天性自躰か學者的に出來居ると言はれたが、此評或は適當かも知れぬのである、兎に角非凡の學力と、智能あるので無ければ、博士となり、大學教授となる事は出來ぬと思ふ、然も教授連中で、君は其一位を占めて居るに至つては、言ふ迄もなく人物たる事が明かである、今や明治の今世に、兄弟三人皆な立派な地位に就かれ、以て國家の爲めに盡さるゝのは、誠に榮譽の次第である。

太田兄弟

兄、は子爵
弟は、法學士辯護士

太田資美　子爵は舊上總松尾藩士で、高五万三千七石餘の殿樣であつた、御維新となつて、今の駒込千駄木町に邸宅を構へたのである、子は元來神經過敏な男であるから、或は神經病者であるとか何とか、彼れ是れ世評に上つた事もあるが、夫れは餘り酷評である、殊に夫人晋子が邸内の池に身を投じたと云ふ近來の事實は、大に世人の耳目を惹いたと同時に諸新聞に種々の批難を受けたのである、余輩は先づ、夫れ等の事實は偖て置き子爵の人物を評しやうと思ふ、子は元來内氣の性質を持つて居る、言へ換へれば消極である、故に今日の進取主義、即ち積極主義と相反するかも知らぬが、其大躰に於ては誤りが無い、兎角向見ずは、成功すれば途方もない大偉業たることがあるが又多くは失敗するのである、子爵は故に大偉業を見る事能はざるも、大失敗は無い、此點は俗物にも出來得る所だが、尙ほ子爵の長所として誇るべき點がある、夫れは沈思事に頓着せざるの事で、己れの眼に影ずる事物は、悉く之を咀嚼して見る、決して輕疎で無い、此れが中々吾人の學ぶ能はざるものである、然し惜しむべきは子爵の未だ當世の才を、應用するの器を有せざるため、或る敵をして服せしむる能はざる所以である。

太田資時　氏は資美子爵の直弟である、君は大學の出身で、法學士の學位を有して居る、大學を出ると農商務省に入つて特許局審査官となり、手腕の程を振はした事もある、其學生時代より至つて沈默で、至つて溫行篤實の君子と云はれた、始終學力優等で、上席を占領して居つた位だから、同友の多くも君を陰に陽に尊敬したと云ふ話である、丁度著者が東京法學院の生徒であつた頃、君も同院の講師で、相續法の講義をせられた事がある、中々明論卓說、其講するや丁寧親切、生徒の多くが事理を解する迄は　反覆して聽かするのである、そこで君を短評するが、現在の職務たる辯護士は、君が性質とはちと適合しないと思ふのである、夫れは外でもない、元來君の頭が學者

的であるから、隨つて世才の二字に至つては聊か缺欠して居る、今日の辯護士は、只一酷流學者流では宜けない、必らずや深く世を味はなければならぬ、即ち今日の社會の通俗を嚙み分けて見なければ、如何な手段方法を用いて宜いかを、知るのに困難である、之れ君が辯護士としての人にあらずして、學者的人物である事を明言する所以だ、殊に長所中の長所とする相續法講義の如きは、恰んど君の右に出づる者は無い、夫れてあるから法學院の相續法講義は、君の受持と定まつて、二十四年より今日に至るまで變らないのである、況して君の性質、沈默溫良、而して謙讓である、其言ふ所は忠信、其行ふ所は篤敬である、之れ余輩が腐敗せる今日の社會に君を容るゝこと能はざる者であると、論走する所以である、然れども君が學者としての人物は吾人の能く認むる所、誰れか又肯首せざる者はなからう、

德川兄弟

兄、は公爵貴族院議員
弟、は伯爵貴族院議員

德川家達　公は德川十六代の孫である、文久三年七月を以て生れた、維新以前德川氏か政權を掌握して居つた時代には、權勢赫々たるもので、公は十五代の慶喜に代つて、幕府の主裁者となるの順序であつた、處が世は一變して、勤王の士が續々顯はれて來て、政權奉還を稱へ、遂に德川亡びて終まつたのである、公は舊靜岡の藩主で、明治元年には、駿河國府中城封邑七十萬石を賜はり、二年に靜岡縣知事に任せられた事がある、甞には英國に留學し、文明の新空氣を吸收して歸られた、ろこで我輩は思ふ、兎角華族には馬鹿が多い、殊に近來は祖先の昔を肩にして奢侈放蕩に耽り、遂には華族の禮遇を停止せられ、或は獄中の人となるのは、吾人の目擊する事實である、此かる有樣に引換へて、公爵の素行は如何であらうか、實に華族社會の鑑で、まさか世が世なれば十六代の德川將軍となつて、全國を蹂躪する御身だけに、何んとなく威嚴尊

容に見受けらるゝ、殊に英資聰敏で、度量の寛宏なることは、華族の中に公の外は見ないのである、公は常に華族たるの本職を全ふして居る、其貴族院議員となるや、一意心を盡され、開會中は一日とても、欠席した事のないのは、余輩の深く敬服する所である、議員は開會毎に公をして全員委員長に推舉する所を見ても、公の貴族界に向つて、如何に德望あるかを知るに足るのである、而して公は忠君愛國の心深く、仁慈の情に富んで居る、一朝事あるを耳にするや、忽ち先んじて巨萬の資を投じて、其志を明かにする、蓋し公の如きは世稀れに見る所である、

德川達孝　伯は家達公の令弟で、其容貌の公に似て居る處は、瓜を二つに割つた樣である、伯は慶應元年五月舊田安家に生れた、幼年時代より秀才英敏で、時に家臣をして感服せしめた事があつたとか、長じて後歐米諸國漫遊を企て、各國の風土文物を見聞して歸つて來た、此一舉は伯をして大に得る所あらしめたのである、次で帝國議會の設けあるや、貴族院議員となつた、其議場に於ける伯は、常に各部の委員長に推舉

せらるゝを思へば、伯の威望と實力とを知ることが出來る、殊に伯の長所は熱心の二字で、何事に當つても熱中して成就せしめされば止まぬと云ふ量見は誠に感心の次第である、而して伯は、平素平民的主義を以て社會に立つて居る、此一事は到底他の華族連には、學ぶことの出來ぬ所さ。

徳富兄弟

兄、は國民新聞社長
弟、は文學家

徳富猪一郎　氏は國民新聞の社長である、其才筆と觀察力とは、彼れの最も長所と知られて居る所だ、君は肥後熊本の藩で、幼少の時熊本に來て、時習館教授近藤先生に就て漢籍を學び、後に有名な横井小楠翁に從つて、修むる所があつた、間もなく元田永孚先生の塾に入つて、勉めたのである、君の思想をして歐洲的ならしめたのは、新島襄氏であつた、即ち君が同志社に入つて、全く其思想の歐化を見たのである、夫れから雜誌新聞の流行せるに會したので、時を得たりとして、自論を公にした、爲めに少しく世に知らるゝことゝなつたものだから、更らに將來の日本を著はし、國民新聞及び國民の友を創刊した、之れか忽ち海内に大喝采を博して、特に文壇の第一流と呼ばるゝ樣になつたのである、今に蘇峰と云へは、誰れ一人知らぬ者はない有樣である、彼れは機に乘じて政海に泳ぎを初めた、時には擧げられて内務省の勅參となつ

たこともあるが、僅かの間に辭職して終まつた、彼れは克く其才筆を應用して世に立つか彼れか最も特得とする所は、俗に綱渡りである、即ち種々の内閣に綱渡をするのであるが、時には仕損して大味噌をつけた事もある、爲めに彼れは世の批難と聲價を落したのである、之は余が嘗に著はした人物と長所と云ふ書物に、詳しく評論してある、兎に角彼れか人物たることは、一人も異論が無い、然るに其弟に。

徳富健二郎　氏と云ふ人がある、號を蘆花と稱し之れ又近來の文壇に花を咲かせて居る、君は兄の蘇峰とは文の流儀が違ふてをるのみか、全く其性行も反して居る、一口に云へば、兄は陽氣で、弟は陰氣である、一人は積極、一人は消極である、兄は當世の才を以て人氣を得、弟は溫良優和を以て人に愛せられて居る、聞く所に依れば、君は嘗に失戀の人となつたこともあるさうだが、其性質から見れば事實かも知れ無い、幵は偖て措き流行や風潮は止むを得んもので、今では蘇峰の筆よりは、蘆花が筆の方を社會が歡迎する樣になつた、近くは君の著に成りし、ほとゝぎす若くは思ひ出の記

などは、中々の評判で、見る内に七八版を重ぬると云ふ姿で、眞に洛陽の紙價を高からしめた、之を以ても君が文壇界に於ける人たることを、證するに足るのである、明治昭代の今日に、兄弟二人が文才を以て社會に迎揚せらるゝのは、實に名譽の次第である。

岡村兄弟

兄、は法學博士辯護士
弟、は醫學博士

岡村輝彦　氏は千葉縣出身の人である、法學博士パリストルと云ふ稱號は、人物としての君の價値を容易に知ることが出來る、君は中々奇才家で人の氣をそらさぬ躰の男である、弄ふだけは弄び、嘲笑して、しまいに靜かに事を落着させやうと云ふ、ちと風變りの癖を持つて居る、思ふにこう云ふ人物だから、法律などの學問は極適當である、彼れは一度英國に遊び、パリストルの學位を占めて歸國してからは、一層名聲赫々たるものであつた、時に横濱には各國人が入り込んで來たので、從つて刑事や民事の事件が日毎に多くなつたのである、そこで政府は此點に深く考ふる所があつたと見をて、法學博士パリストルの肩書を有する岡村輝彦を、其地の裁判長としたのである、處が例の岡村であるから人氣澤山に、且つ外國人に對しても極く受が良いので、一層岡村の名が世に賣れて來た、然し君が志は到底地方

裁判所長位を以て、甘んずることか出來ないのは、見え透いて居るので、彼れは間もなく辭職して辯護士と云ふ氣落なものになつたのである、さあ商賣換をして見ると、一層野に知られて、苟くも外國人を相手にする事件は、岡村でなければならぬと相場が定まつて終まつた、流行や風潮は恐るべきもので、彼の増島六一郎が、矢張り法學博士バリストルと云ふ資格で、世の歡迎を受け、重大の事件は皆な増島の所に行つて依頼するのであるが、其のくせ吶辯無頓才の増島は、毎時も訴訟で勝つたことは無い、原告となれば請求相立ずとか、却下とか、棄却すとか、極下さらぬ判決を受け、被告となれば原告請求の如く履行すべしとか、訴訟費用は被告の負擔であるとか、情なき判決の下に、敗軍の將となつて終まうのである、然るに世人は増島を俟つに切なると、増島の信用が日毎に重なるのを思へば、之れ實に世のバリストルとか、法學博士とか云ふ肩書を慕ふばかりでない、君の人物たる所以に原因するのである、岡村も同じくバリストルで、賣り込んだのに相違ないが、彼れは又性行に於て、増島等と大に相反する所があるのみでない、彼の長所は決して他の學ぶことが出來ない點がある、即ち彼は辯最も清快で、一言一句能く其要領を盡して居る、而して世を渉るに付ても、訴訟上に於ても、氣をそらさぬ妙の鹽梅は中々巧者である、君は此秘訣を應用し、加ふるに學者として、常に正義正道を守つて居る、其證據には岡村か行動に付ては一人の敵が無い瑣々たる批難だに無い處を見れば、岡村は先づ清廉潔白の男だと評して、差支ないのである、彼れが人物として今日あるのは決して偶然に出たのでない事は明かで、其專心訴訟事務に從事することは、十有餘年である、未だ飛ばず鳴かず世を送つて居る、是れ君が大伎倆を、世に發表するの時期でないと確信しつゝあるからである、君か將來は宙に法學者として尊重せらるゝ許りでない、尚ほ能く他の方面に向つて、巨名を博する時があるのを、我輩は豫言して置く處である。

岡村龍彦　氏は輝彦氏の直弟である、君は兄とは筋違ひて、醫學者として近來非常に名を賣られて居る、君は醫界の將來を察して、外國留學を思立ち、英國に行つて大學

に遊び、皮膚生殖器、尿道、耳鼻等の諸病を以て專門に研究を遂げ、其國の學位を取つて此頃歸朝された、さあ歸つて來て見ると、君の研究された如き專問の醫者は少ないので、大學からも是非教授になつて貰ひたいと申込まれたが、之を謝絶つて神田西小川町に開業したのは、遂昨年の事であつた、開く早々患者の山を爲す有樣で、殆んど寢食の時を失ふ姿である、之を以ても如何に君が世の信用と、其伎倆の卓絶せるかを、推測する事が出來るのである、其年の七月一、人爪の發育に就て二、色素性究皮症に於ける血液の性狀に就て三、初胚基に於ける毛髮發生の方向論四、列序性母斑に就ての論文を提出して、醫學博士の稱號を授けられた、今や兄弟二人何れも博士となつて世の推重を受けて居る所以の者は實に名譽の限りである、而して彼れか人物たることは、敢て余輩の言を俟たない。

伊澤兄弟

兄、は貴族院議員
弟、は警部長

伊澤修二　氏は長野縣の舊高遠藩出身である、此男元來秀才にして且英敏であつた、明治五年には文部省の出仕であつたが、段々出世して、高等師範學校長から、貴族院議員と迄爲つたのである、其間彼れが經營は一方ならぬもので、世の毀譽は五月蠅樣であつた、彼れは其初め、文部省の小役人となるや、忽ち拔擢されて米國派遣を命ぜられ、同十年には文部一等屬より權大書記官に飛進し、夫れから東京音樂學校、東京盲啞學校長を始め、文部省の參事官、臺灣總督府民政局事務官等に、歷任されたのである、後ち事務官を罷めて、貴族院議員に直撰された、其議場に現はるゝと、今度は流を換へて、政府攻擊と出掛け、文部省の問題や臺灣の施政に就ては、己れが實際に當つて、其秘密を知つて居るのを機とし、政府攻擊をして止まなかつた、殊に彼れは辯も良し態度も良いと云ふ所で、議員内に非常の勢力を持つた、政府委員も彼れの

攻撃には、大に閉口したと見えて、誰れが考へた事か、内閣では伊澤を賣收して、味方黨として終まつて、來年の攻撃を未然に防がうと一決し、先づ伊澤に向つて、次の議會には沈默を守る事の條件を以て、彼れを高等師範學校長に任命したと云ふ話である、我輩は此風聞に付て、或は事實であつたと、現に今日迄信じて居る、其證據には彼れ次期の議會には議場に於て、一言半句も言はなかつた、どうして中々〻〻辯を弄したがる彼の伊澤が、何かそこに魂膽が無くつて、默つて居る理由が無い、議員の多くは君の行を見て、暗に之を封したのである、此の如く餘り利れ過ぎる男で、其高等師範學校長となるや否や、種々の方面から批難の聲が高まり、殊に萬朝報の如きは、必死となつて彼れの人身攻撃を初めたので、今度は反對に苦しめられた上句、辭表を提出して、元の杢阿彌となつてしまつたのは、笑止にも又氣の毒であつた、然し彼れは非常の才物であるから、之れしきの事には平氣さ、又眞に手腕があるから、只期を待つと云ふ事を以て深く決して居たのである、以上は君が來歴の最も重なものであるが、

其詳細に至つては如何位滑稽じみた事があるか分からない、兎に角君の人物たることは、吾人又之を認る所だ。

伊澤多喜男　氏は修二の實弟で、現に岐阜縣に警部長を奉じて居る、此男又中々の才物で、且つ剛物である、一度言ひ出した事は、貫徹せねば止まぬと云ふ性質を持つて居る、余は内務省で十二度君に接した位だで、未だ能く其性行を評する事は出來んが、彼れを骨相學の上から見ても、兄に似た點が多い、殊に職を警察事務に盡す處よりしても強かない男だといふ事は、吾人に解し得られる、君は現に其地に於て評判が宜しい、又實力をも認められて居るのである、然し其實力と勢力に誇つて、關東旗を出した時には、失敗することがある、此邊は深く君に注意して置くのだ。

林兄弟

長兄、は前に農相現に貴族院議員
次、は錦鷄間祗候貴族院議員
末弟、は前農相現に政友會總務委員

林有造氏は、當代の人物である、彼れは自由黨の策士として常に世の推重を受けて居る、全躰政治家には辯が必要で、政黨の經歷上に於ても明かなる如くに、各黨員は夫れ〳〵己れの勢力を擴張しやうと思ふて、諸國に遊說を試み、演說會を開くのは事實である、そこで自由黨員の内にも能辯の士も多いが、林の如き辯者は少ないのである、彼れは俗に土佐辯と云ふて、九州や東北の人間とは大に其發音が違ふ許りて無い、能く人をして感動せしむるのである、彼れは此かる辯を有して居つても之を弄しない、又之れを利器とし無い所は、誠に不思議と申して宜しい、然かも沈默を守ることに付いては、犬養木堂、佐々克堂との三人か呼物となつて居るのである、此の如く始終沈默の君が、自由黨内に非常の勢力を得るのは、實に策士の名に背かない、而して彼れは全く舞臺の人にあらずして、樂屋の人と評したものがあるが、至極適して居

る、彼れは權謀術策を施こし、百難して、勇進邁往するの氣力に富んで居る、遠くは明治十一年の政府顚覆事件を始めとし、近くは自由黨と伊藤内閣との連鎖を全ふしたるが如き、之れ全く君の策である、此間土佐に立志社なる集團を設け、自由民權說を提唱して、天下を風靡し遂には藩閥を打ち破ぶつたが如きは、君の大功である、憲法政治大成史上には、磨滅することの出來ぬ、人物と云はねばならぬ、彼れは言ふ所至つて明晰であつて、抑揚自から節を守る男である、黨員擧げて彼れに服す、吾人は認めて憲政内閣の一員とした所以のものは、決して偶然て無い、彼れは三人の兄弟中、最も苦心經營を重ねた丈あつて、世に珍らしき愉快なる花を咲かせた、之れ彼れが世に出つるの當初に於て豫め期して居つた所である、

岩村高俊氏は林の直兄で、弘化二年十一月を以て生れた、彼れは明治元年に、東山道先鋒總督府書記となつたのが、出世の始めであつた、夫れから同府の警察吏や、應接係を經て軍監となり、更らに榮轉して新潟府の出仕となつた、後間もなくして宇都

宮、神奈川の權參事、佐賀、愛媛の權令、內務大書記官、石川、愛媛の縣令、愛知、福岡、廣島の知事に歷任したのである、君は學才があり、且つ實務に長じて居た、其內務省出仕となつた時には、時の內務卿は大久保利通であつた、折から彼れは年壯にして能く他の官吏を拔くの伎倆があつたものだから、一方ならず愛されたばかりでなく、大久保が淸國へ派遣さるる時、君も又隨行を命ぜられたのである、後官を辭すと忽ち華族に列し、錦鷄間祗候を仰せ付けられた、續て二十五年に、貴族院議員に勅任されたのである、以上の經營を一見して、如何に彼れが人物であり、又國家に功勞が有つたかを、知ることが出來る。

岩村通俊　氏は高俊の弟である、三人か三人顯官に就き、且つ世間から推重せらるゝと云ふのは、誠に珍らしい事だ、又名譽の次第である、君は天保十一年六月生れて、明治元年に御親兵總取締や、軍監に任ぜられた、夫れから聽訟司判又は函館府の權判事となり、開拓判官、大判官を經て、四等判事、山口裁判長、議官となり會計檢査院

長と迄昇進した、元來秀英で其上卓見な男であつたから、上官にも至極氣受けが良かつた、之れ等が出世の根據となつて、遂には沖繩縣令、恩給局長、司法大輔、北海道長官、元老院議官、農商務大臣、宮中顧問官、ありとあらゆる官階に就たのである、彼れが功勞空しからずに、後華族に列せられ、明治二十三年には貴族院議員に敷任せられた、其農商務大臣となつた時分には、世は擧げて彼れに望みを屬したのである、現に御料局長となつて宮內に身を奉して居る、彼れは順序から云ふたなれば、今少し內閣員となつて居るべき人物だのに、何故に農相となつた許りて、引込んで終まつたかと云ふに、兄の有造の如く、政治思想は持たない、極々の眞面目、夫れで、ある畫策などゝ云ふ事は、とんと腦裡に包藏してないのである、之れ君か早く內閣の地位を去らなければならぬ次第であつた、兎に角、兄弟三人が顯官に就かれたのは、誠に名譽の外はない。

寺尾兄弟

兄、は理學博士大學教授
弟、は法學博士大學教授

寺尾壽　氏は舊福岡の藩士で、安政二年九月廿五日筑前那珂郡春吉村に生れた、父の名は喜平太と呼ばれた、君は幼年時代より異才があつて、常に戲れに字を書いたり、文章を誦むことを以て、樂みとして居つたのである、殊に記憶の強い所などは、成人でも及ばない有樣であつたさうだ、明治三年に笈を負ふて上京し、先づ外國語學校に入學して、佛語を修めたが、後開成學校に入り、續て大學理學部を卒業し、官費留學を命ぜられ、佛國に渡航したのである、其地に着すると、天文臺に行つて、專ら星學を研究し、傍ら巴里大學に數學星學を修めた、爲めに得る所あり、後米國を經歸朝し、文部省御用掛を命ぜられたのが明治十六年三月、夫れから大學教授となり、學藝志林編纂事務員や、英文續本編輯委員などを命ぜられ、廿二年六月には、東京天文臺長に任ぜられた、續て同年の八月理學博士の稱號を授けられたのである、現に理科大

學の教授となり天文臺長を兼ねて居る、元來君は熱心な男で、殊に天文學には氣狂ひの樣である、現に世の人は之を評して天文狂と言ふて居る、斯學を詳く知つて居るものは、君一人である、而して君は我國に於ける斯學の鼻祖だ。

寺尾亨　氏は現に東京大學の教授となつて、國際私法及び刑事訴訟法の講坐を擔任して居る、元來君は大學出身でなくつて、司法省の八年卒業生である、法律學士の稱號を得て、後刑事訴訟釋義と云ふ書を著はしてから、世に君の名を知られた、其初め君は法學などの、理窟張つた學問をする考へはなかつたが、兄の壽が法學をやれ、理學などは面白く無い、お前は法學が善いと、無理やりに君を法學者にして終まつたのである、さあ初めて見たら君の意には適しない、去らばとて中途にして志を變ずるが如きは、男子らしく無いと、遂に研究を果した、其刑事訴訟法釋義を公にすると、斯法學者は之れは珍らしい著書だ、訴訟法の眞義は、之れで始めて解ると云ふ有樣、どし〳〵世の歡迎を受けた、偖今日となつて見れば、彼の著書などは讀むに足らぬの

て、我輩の如き淺學の者にも、まつと立派に出來るのである、然し其當時は、夫れで珍重されて居つたのは、幼稚なる時代の又止むを得ない所である、後深く考ふる所があつたと見えて、佛獨二國に留學し、專心一意國際私法を始め、公法學の研究を遂げて歸つて來た、すると刑法や民法よりも、當時は國際法の研究をする者が多くなり、且つ高等文官や辯護士判檢事の試驗には、更に國際公私法の二課目が加はつたので、我れも〳〵と研究を初めたが、折惡しく依るべき好書物が無い、止むなく三崎や中村、秋山、山田等が著書、講義を讀み厭かして居つた、すると計らずも君が歸朝して大學の教授となり、傍ら國際私法論なるものを著はしたのである、讀んで見ると嶄新奇拔、どうして中々明論卓說がある、一人より二人、二人より二千人二万人と、讀者が增加して、一時に君の名聲を高めた、之を聽付けた諸法律學校では、是非講師になつて貰いたいと、毎日の如く先生の宅に押し掛けて頼むので、殆んど引張り凧の樣に、先生も一時は閉口したと云ふ有樣、そんな工合で、社會からは君を歡迎し、且つ推重して

措かぬのは決して偶然で無い、而して君は天性沈着、縝密周到の腦髓を持て居る、故に如何なる紛亂錯綜でも、解して敢て疑惑を止めぬのである、君が大學者としての、名譽を荷ふ所以の者は、蓋し當然の事である。

澄川德　氏は博士の弟之れ又大學の出身である、醫學士と云ふ稱號を以て、世に立つて居る、未だ前二名の如く、香名を博さゞるも、猶春秋に富んで居る、以て君の將來を俟つ事が出來る、而して其の末弟。

小野隆太郎　氏は一風變つた辯護士と云ふ事務に就かれて居る、氏未だ人物として、世の歡迎を受けないが、學術の進歩したる今日に於て、辯護士の資格を得る事は、決して容易の譯で無い、必らずや又非凡の才學を要するのである、之を以てすれば、君が現在と將來を察し得られる、今や兄弟四人相揃ふて、平和の戰爭に出陣し、敢て後れを取らざるに至りては、誠に名譽の極である。

安田兄弟

兄、は明治商業銀行頭取
弟、は東京火災保險會社取締役

安田善彌　氏は商傑安田善次郎の孫である、其初め安田翁には子供がなかつた、そこで善四郎善助の二人を養子に貰ひ受けて、兩人に夫れ〳〵嫁を迎はせたが、間もなく善助夫婦は、二人の子を擧げたのである、其長子が親の名を受けた今の善助で、次子が即ち君である、幼少の時より中々の奇才もの、することなすこと、丸て成人の樣であつたとか、ために翁も非常に可愛がり、且望を一に此善彌に屬して居つたさうだ、彼は最早十二歳の頃より、銀行の給仕となり一生懸命に行務に從事した御影で、十六七歳になると行員に擧げられ、安田銀行栃木支店詰を命ぜられたのである、處が根が悧巧の男だで、客の應接を始め万事万端に抜目がない、忽ち信用を得て、來る客は皆此安田を當に、取引をするといふ樣な有樣、他の行員等は之を見て、顏色もなかつたとは、さもある可き次第さ、後安田銀行本店詰を命ぜられ、久しく同行の重任を負ふて

居た、此間十數年の長き苦心經營は、實に察しやらるゝが、是れがために得たる所の幾多の經驗は、遂に今日の君を作り出す事が出來たのである、其後兄の善助氏に代つて、明治商業銀行の頭取となり、現に行員を統督して餘念がない、只余輩が君に會ふて感じたのは、彼れ頭取といふ地位にありながら、少しも之を鼻に掛けねば、見識も振らぬ事である、其勤むる時には、他の行員と同じく、誠心誠意、行務を取りつゝあるのは、何うして尋常人の爲し得られぬ所だ、然し之れも、安田翁が一族に向つて、勤儉の二字を訓諭したるのと、一は君が深く解得したるからに據るのであらう。

安田善助　氏は善彌の直兄で、同族中の一人物と仰がれて居る、流石は翁の仕込みだけに、商業上の御手際などは、中々驚く可き處がある、其商機を見るの奇敏にして、一も之を誤まつたことのないのは、只管感服の外はない、彼れは嘗に明治商業銀行なるものを創立して、社長に擧げられ、傍ら東京火災保險會社、其他二三の會社銀行の重役となつて居たが、海外商業の實況を視察するの必要に、氣が付たと見えて、昨

年の秋、世界の商業地とも云ふべき、米國に渡航し、只管文明國の實況を視察して來た、茲らから考へて見ると、彼れは學問をせない割には、中々卓識の人物たる事を知り得られるのである、此擧は彼れをして、生ける學問をしたと同じ事で、其實務に當る時に於て、何の位の利益を得るか分からない、否な實業團をなせる安田一家は、彼れが此一擧と共に、直接間接に神益する處は尠なくないのである、兎に角君は、安田翁の孫として恥かしからぬ人物であると、余は聊か賞贊の辭を與へて置く。

長谷川兄弟

兄、は衞生局長、濟生學舍長
弟、は醫學士

長谷川泰　氏は新潟出身の人である、元來越後と云ふ國には、下層社會の人間が多いかわりには、又飛越て優れた人物もあるのだ、其證據には種々の方面に注意して見れば直ぐ分かる、假令ば實業家として大倉喜八郎の如き、政治家として波多野傳三郎の如き、醫者として石黑況齋の如き、夫れ〳〵當世の人傑が出て居る、君も又其一人で、本職は醫者であるか、中途にして商賣をそつち除にして、政治家となつて終まつた、思ふに醫家としての技倆は在るのでなくて、實は政治家となり、社會に出て切りまくるのが、君の長所であり、且つ君の精神であるらしい、故に醫者となつても、手術を以て名を賣つたのでなくて、矢張り當世の才を應用したのである、夫の濟生學舍を創立して、幾萬の學生を養成しつゝあるが如き、政海を去れるが如く見せかけては官海に飛び込み、衞生局長の椅子に腰を据へ、そして位置と信用とを確保し、俗人をし

て陰に陽に崇敬せしめやうと、爲しつゝあるが如き、中々遣り工合の賢いには感服の外はないのである、彼れは猶野心を高めて、濟生學舍を私立大學にしやうと計畫して居る、夫れには先づ己れ現在の地位に在つて、我田引水的の規則を製造し、之れで大丈夫と云ふ時になつて、始めて重荷を下ろさうと云ふ量見は、能く余輩の眼中に影して一點の曇りが無い、彼れは確かに奇才に富んで居る、惡く評せば陰謀ある人間である、然し我輩は、彼れが手段や方法は不問に付して、先づ私立大學を創立しやうと云ふ精神と目的に至りては、兩手を擧げて贊成するのである、試みに我國に於ける現下の大學制度を見よ、誠に寒心する次第である、嘗に東京市教育會々長をして居つた星亨が、教育の方針に付て、痛憤的の演說をした事があるが、夫れには實に服したのである、星は先づ現下の教育方針は勿れ主義社杆的主義で、換言したなれば、小成に安んずる、所謂嶋國主義に陷るのである、故に世界の趨勢と相伴はないものが頗る多い、宜しく消極を棄て、積極の方針を取らねばならぬのである、更らに大學のやる

事なども、總て氣に入らぬ、即ち卒業すれば直ちに役人になりたがる、出る者出る者、孰れも甘んじて非立憲的の小役人となる、斯んな根性で何が出來るものか、此れは強ち學生の惡いのでなくて、教育の方針が宜しく無いからである、故に余は現今の大學を信頼する事が出來ない、故に爾後は專ら私立大學の勃興を、奬勵しなければならぬ、夫の慶應義塾や、早稲田大學の計畫は、予の最も望を屬するものであると、演べられた事がある、此言誠に幾千万金の價ある所で、今後の教育方針は、宜しく星の數言に依つて着々改良し得らるべしとは、我輩の豫言する所だ、泰氏は又省る所があつて、私立大學を創立しやうと云ふ決心を抱たのは、深く國の爲めに感謝するのである、見よ米國の學制一汎に付て、政府直轄の下にある大學は、誠に僅少なもので、多くは私立である、而して之れが諸多の經費は、個人の寄附に依つて成り、數年の後には基金の利息で、大學の維持が出來ると云ふ有樣、彼國教育の方針は、全く世の進歩ての點に着眼して、常に世と共に方針が遷移されて行くのである、結局彼國は積極進歩

を以て、一大根據として居る故に星が嘗の意見も、米國流儀にやつて貰いたいと希望したのに相違が無い、そこで長谷川も確かに同樣の目的と、意見を持てせられつゝあるに疑ひない、彼れは將さに、祈的大學卒業生を排斥しやうと云ふ考へてある、彼れが野心は、獨り彼れが終生の目的たるのみでない、教育界の爲めに、否な國家の爲めに、喜ぶべき事である、泰氏が人物として今日ある抑々又偶然で無いのだ。

長谷川順治郎　氏は泰氏の直弟で、醫學社會に知られて居る、彼れは確かに泰の弟だけあつて、其性行に於て、大に相類似した處があるが、又絶對的に反對した點もある、夫れてあるから、兄の泰とは常に折り合はない、意見の衝突せない事はないのてある、君は兄の如く當世の才を應用するの力に乏しいが、手術の點に至りては、兄の筍醫者と反し、然かも醫學士の稱號が、君の技倆を證明し得らるゝ、殊に本來が着實で、其親切且つ叮嚀なる點は、確かに君の長所である、彼の泰氏の如く、傲慢粗暴なるに比し、大相違の性行を持つて居る、故に君は實際的の人間で、決して陰謀や畫策など

を企む事は、根元から出來無い、又全く此かる野心は、持つて居らぬ樣に思はるゝのてある、君現に濟生學舍の講師となつて、專心子弟の教薫に餘念が無い、然して君未だ學位を有する許りで、別に之れと云ふ大事業を、就げた事が無いのにも拘らず、世人は君の實力と、君の德を慕ふて居るのは、何てあらう、余は聊か君が一個の人物たる事を疑はぬものてある。

名士の兄弟

終

明治三十五年九月八日印刷
明治三十五年九月十一日發行

著作者　岩崎徂堂
發行者　岩崎鐵次郎　東京市神田區鍛冶町十七番地
印刷者　戸上義章　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

名士の兄弟
正價二十錢

著作權所有

發兌　東京市神田區鍛冶町十七番地　電話本局三〇六七番　大學館

岩崎徂堂君著　正價廿五錢
小山榮達君畫　郵稅四錢

明治
豪商致富時代

果報は寢て待つと雖も來らず棚の上の牡丹餅は自ら落ち來らず、安樂を求め懷手して富を得んとし合掌禮拜して福を得んとす笑ふ可き哉明治の豪商がその始めは、皆素寒貧なり眞裸なり。その不撓不屈の精神と機敏濶大なる眼識とは此に鉅萬の財產を獲取せり、奇運か僥倖か本書悉くこれを說盡す、

蛟龍子編
正價二十五錢　郵稅四錢

男女
東京學校案內

遊學の第一の方針は學校へ入學するに在り、而も、其撰擇宜しきを得ずんば齒牙遂に及ぶ可からざるものあるは深く遊學青年の考慮す可き事なり本書は最近の調査に係り、記事は責任を帶ひて正確綿密を期す、男女學生が東京に於ける諸學校の規則、模樣を知らんとするには最も便利なる書なり、敢て一本を勸む。（明治三十五年三月改）

岩崎徂堂君著

近刊

名士の兄弟

正價廿五錢
郵税四錢

世に快事多しとも、然れども一腹一生の兄弟が共に蘊奥の學殖を極めて相競ひ共に赫々たる名聲を博して並び稱せらるゝの快事は又及ふものの無けん本書は現今社會に活動せる人物の兄弟が逸話傳記を描きたるものにして、立志の興奮劑たる事疑ふ可からず、又以て家庭必須の書なりといふ可し

東京神田鍛冶町十七番地

大學館

須藤靄山君著

近刊

名士名家の夫人

正價廿五錢
郵税四錢

區々たる一婦人、纖弱なる女子遂に天下無用の長物たる乎、事に表裏あり、物に陰陽あり、國の盛衰、家の興亡、巾幗の勢力は由來概し來れる可からざるものあり、名士の稱名、家の譽、嗚呼豈亦た獨り男子の功に歸す可けんや暴風松柏を倒さんとしてこれを支ふるもの何ぞ松柏に其身を託する葛蘿ならずや然らば婦人の功亦冥々に附す可からざるなり

原田東風君著
小山榮達君畫

正價廿五錢
郵税四錢

魔窟叢書第弐編

乞食

人間が生活程度の最も下低に位するものは乞食なり、乞食は寔に社會の風教上將た文明の點より最も忌む可く最も醜きものゝ一つなり、而も其中不具癈疾の然らしむるもの放蕩墮落然らしむるものの千差万別社會改良の人士は先づ乞食が現在の狀態を深く知らざる可らず

池田錦水君著
岡落葉君畫

定價廿五錢
郵税四錢

無錢修學

標題の突飛なるに驚き、且つ怪しみ空手徒拳、

大學者たり得ると思はゝそは大なる錯誤なり。本書の目的は青年が苦學力行を奬勵するにあり、因循姑息の念を除去するにあり、獨立自治の精神を發揮するに在り。而して今これを抽象的の論評を用ひず具躰的の筆法に依て、趣味津々卷を措く能はさらしむる中自ら讀者を導き敎へんとす。

池田錦水君著　正價廿五錢
岡落葉君畫　郵稅四錢

戀の一年有半

清純の想流麗の筆（讀者をして恍惚卷を惜く能はさらしむるものはそも何が故ぞや）一年有半に於ける戀愛は如何に多樣に如何に夢幻に人情の波瀾浮世の轉換（寔に應接に遑あらさらしむ）戀愛の原書（を知つて而も未だ胸底疑惑を抱くもの）數多き寫本（の中先づ第一に本書を繙いて可なり）

池田錦水君著　正價廿錢
小島沖舟君畫　郵稅四錢

婦人と戀愛

戀愛は青春の花（なり而して婦人は）戀愛の權化（なり、青春の情火炎々として燃ゆれば）功名野心（もこれに抗する能はず、而も男子に在つては一時の敗寄たり、婦人に在つてはこれに依つて）笑ひ又泣き生き又死す（婦人は戀愛と）終生離る能はざるの（宿緣あり）詩人文士（たるもの本書を繙いて深く研究するを要す）可世の青年男女（またこれに依て大に悟る所ある可し！）

原田東風著　岡落葉畫

暗黑の青年時代

正價廿五錢郵稅四錢

恐る（可く）警む（べきは青年時代なるかな）惡魔（耳に囁き）妖鬼（袖を惹く、鄕關を出つる時何そその決心の堅固なるや歸鄕果して幾人か錦繡を纏ふや、吁、暗黑なる青年時代なり、）前途に光明（を認め）一道の活路（を得んとする者、先づ本書に依て、）準備（せよ）警戒（せよ、）

押川春浪君著
岡落葉君畫

空中大飛行艇

世界怪奇譚第三編

正價廿五錢　郵稅四錢

春浪君の著（なり、「奇人の旅行」は膽豆の如き小人輩を驚かし「世界武者修行」は）愈々出て愈々奇（「空中大飛行艇」に至つては）碧眼豚尾（の膽を挫く、）世界万國（誰か驚愕せざるものあらんや空中大飛行艇の）新發明（ありしをや）輕氣球（其用をなす）軍艦（また必要を見す、未來陸戰海戰は正に空中大飛行艇に依る行文流暢記事の快例の如し、）

原田東風君著小山榮達君畫

魔窟叢書第一編

木賃宿

正價廿五錢 郵稅四錢

社會の暗面を知らんと欲せば先づ下層の生活を研究すべし下層の生活を探らんと欲せばその最も適切にして複雜なる木賃宿を觀察するを便とす木賃宿の活寫はよく社會の罪惡亂調病源を指摘して餘蘊なからんとす而も此事や容易に非ず著者苦心慘膽の處唯その奇警緻密なる觀察に止まずして活寫の筆法に存する又これ一部の好小說

原田東風君著岡落葉君畫

貧民窟

正價廿五錢 郵稅四錢

勞働問題、社會問題、風俗宗教等に力を盡しつゝある人士は第一に貧民窟の現狀に精通せざる可からず、從來空論の喧々たるに比してこれが狀態生活を寫したるの書甚だ少し著者これを慨し親しく其境に臨み非常の苦心を以て本書を作らる行文極めて趣味あり彼の徒らに統計的記實的のものと同一の比に非ず。

岩崎徂堂君著岡落葉君畫

田中正造奇行談

正價廿五錢 郵稅四錢

肖像筆蹟入（再版）

明治の佐倉宗五郎とは誰ぞ鑛毒問題に十年一日の如く狂奔盡瘁せる田中正造翁其人なり翁が行動たる總て熱血の餘に出で墮落社會に在ては寔に人の模範たるものあり本書は翁か幼時より今日に到る逸話奇行を蒐めたるもの、寔に近時有益の書なり。

東臺隱士著　岡落葉畫

名士の交際術

正價廿三錢 郵稅四錢

本書は田中正造、佐藤鬼少將、江木衷、北垣男爵、久保田讓、高木辯護士、平岡浩太郎、大隈伯爵、頭山滿、其他現今有名の人士か應接間は如何に裝飾せられたるか如何に應接し如何に談話するか一々訪問し實見したるものの筆を以て描きたるもの、一讀極めて寫實的評論的なるこれかの名士が面目躍如として活現し宛然讀者自身名士と談話する感あり、

宮崎來城君著

鄭成功

正價卅五錢 郵稅四錢

鄭成功は國姓爺の名を以て從來稗史小說に作られ演劇に仕組まれ日本人に深く記憶せられたり、而かも未だその完全なる實傳あるを見ず

宮崎來城先生嘗て支那臺灣を遊歷して珍奇斬新の材料を有すると頗る豐富此に先生、謹嚴にして而かも瑰麗の筆觀を新にし筆を揮つて鄭成功一篇を著さる、これ先生が近年子弟かの最も苦心の餘に成るもの以て青著中の好讀本たるを期せられたり。

生田葵山人著（アートペーパー美術謹入）

貴族の戀

正價廿八錢 郵稅四錢

生田葵山氏の思想豐富にして筆力極めて精緻青年作家中天才の名あり

貴族の戀一篇は葵山氏が苦心慘憺の作なり、上流社會の戀愛を描きて運筆極めて深刻、妙齡芳顏の一令孃二個の紳士を戲弄する所の如き描寫は心理を發いて妙殆んど神手の感あり

木村鷹太郎君著

バイロン文界の大魔王

正價四十錢 郵稅六錢

色刷寫眞版數葉挿入

本書はバイロン卿が幼時より終焉に到るの生涯次を逐うて精細その性格その戀愛その文字その思想悉く敍說し評隲し眼光炬の如く筆勢火の如し狂熱詩人が面貌活躍して、吾人が面前に髣髴たらんとす寔に寂寞たる文壇に一道の活氣を與へたるものと言ふ可し

興謝野鐵幹君著

新派和歌の栞

正價廿五錢 郵稅四錢

本書は鐵幹君が多年の間初學者の爲め、親切叮嚀を旨として註釋、評論、說話せられたるすべて新派和歌に關する著作を蒐錄したるもの、實に歌壇の珍と稱す可し、

海陸軍談

正價廿五錢　郵稅四錢

野蠻島

正價廿錢　郵稅二錢

日本男兒

正價廿錢　郵稅二錢

池田錦水君著
小山榮達君畫

奥樣と孃樣

正價廿五錢
郵稅四錢

丸髷姿、は品よき中に**苦勞**の絶えぬ面影あり

高島田姿は美しき中に**惱める風情**あり、奥樣が勞苦は如何苦あれは慰めありその如何、令孃か惱みは如何、惱みあるか故に樂しみあり其の如何奥樣と令孃に關して**餘蘊**なく寫し出せしものは本書なり、

嗜好

希望

結婚せざる人の爲には**指導者**たり已に**妻たる人**には**好伴侶**たり、

駿臺隱士著

學生坐右叢書第三編 學生讀書法

正價廿錢
郵稅四錢

讀書をするに**坊主が經を讀**む樣では千卷萬卷何の益なない殊に今日の樣に著書が數限りがない狀態では殊に讀書の法を知らないと**時間と費用**に計る可からざる損害を蒙るのである依て苟くも忠實なる考をもつた學生は讀書法を會得して**方針を誤らぬ樣**にせねばならぬ

押川春浪君著

世界怪奇譚第四編 怪人奇談

正價廿五錢
郵稅四錢

寫眞版表題數葉入

已に**人心を驚倒**す、本書の記事推量するに足らん、我れか我れに非す彼か彼に非す**疑團百出**、煩悶痛苦已にして、我れ我れなり彼彼なり、春風一ひ來りて堅氷融くるの感ありこれ一篇の骨子の梗概なり、其の他**奇俠士、戰場の花**如何に讀者を惑しむるぞ加して寢食を忘れしむるに著者、**圓熟の筆**を以てしたれば、**婦女童幼**亦その趣味を解するに難からず

世界怪奇譚

正價二十五錢　郵稅四錢

押川春浪君著
岡落葉君密畫

第一編　奇人の旅行

奇人の旅行は世界怪奇譚の第一編として顯る、夫れは千變万化にあり之に配するに奇人を以てす故に如何に本書が**意表に出づる**記事を以て滿たされたるかを知れ、本書一度世に出だされたらんには彼の一九が**膝栗毛**は最早本箱の中に押込らる可し

世界怪奇譚

正價廿五錢　郵稅四錢

押川春浪君著
岡落葉君畫

第五編　魔島之奇跡

三千里外飛鳥は絶ち、水天盡くる處、人烟あり、**鬼面妖顏**、人肉を食ひ獸血を啜つて飽かず、これ所謂魔島に非ずして何そや、**珍寶山**の如く而て其數を知らず、**蓬萊島**の名が依て起る所か本書記する處何ぞ、征伐にあらず、遊勝に非ず、探險乎曰く、**大冒險**にして又**一大富豪**が立身の小說たり

押川春浪君著
岡落葉君密畫

第二編　任俠鐵勇　世界武者修行

正價廿五錢　郵稅四錢

一丈夫あり剛勇を顯はす**黃金と見ること**土芥の如く貧者弱者、**蘇生の道**を得、世界を見ること盆栽の如く、**碧眼の膽**菱み**豚尾の眼眩**く、讀去り讀み來り痛快壯絕卷を掩ふに忍びざらしむ寔に**眞正の大和魂**を發揮して**偽文明**を罵倒するもは本書なり

押川春浪君著　岡落葉君畫

第六編　續空中大飛行艇

「空中大飛行艇」を愛讀せし諸君は**美人**飛行艇上より落ちて**雲漠々の一大警報**巴里全市をして震駭せしめたるの事實を知る可し、「續空中大飛行艇」は即ち筆を此に起し、新聞記者軍人、華胄並びに大發明者一條理學士等か飛行艇に乘じて南洋**瘴烟毒霧**の地を指して、搜索に向ふ。**珍事續出**怪聞頻りに發す讀者愈々**五里霧中**に彷徨ある感あり結尾に到て**東天旭日**の波濤上り大洋として**光彩**を添ふ飛行艇の**大勝利**巴里全市**陸離**として**大歡迎**!!

早田玄洞君著

臨終の一日

正價廿五錢 郵稅四錢

本書は臨終の際に於ける**英雄豪傑**聖人君子**美人烈婦**高僧碩儒等が言行を描きたるもの、**平常の覺悟**は臨終の際によつて解決せるゝものなり、本書を讀むも**豁然大悟**すべきは疑ふ可きに非ず一部の小傳と見做すも可なり、蓋し**精神修養上**必須の好著たり

早田玄洞君著岡落葉君畫

膽力修行

正價廿五錢 郵稅四錢

語に曰く**心は小**なる可し、**膽は大**なる可しと、膽力を養成せずんば、**優勝劣敗**の世界に於て其名を揚げ其果を收むる能はず本書は著者或は**妖怪**を探り**險山**を攀り、**幽靈**を觀破する等**小說的の經歷談**を極めて、有趣味の筆を以て描かれたるもの、**一讀三嘆**蓋し卷を掩ふ能はざる可し

宮崎來城君著

名流叢談

第一編 苦學談

正價二十五錢 郵稅四錢

苦學十年始めて一家を成す可し古人今人世に名聲を博し天下に榮譽を得るもの孰れか苦學の結果ならさらんや

來城氏が**健筆富想**天下悉く敬服する所本書は實に氏が苦心の餘に成りたるもの天下**青年と益**する事計る可からさらんとす

涵養社編纂

現代大家青年の憲法

正價廿錢 郵稅四錢

如何にせば**成効す可き乎**これ滿都幾萬の青年が日夜焦慮する問題なりとすこれが秘訣を知らんと極めて空漠摸索する所なく半途學を廢するの悲運に了るは何ぞやこれを要するに彼等は**精神**を措いて**形式**を學べばなり本書幸に**此等の弊を拯ふ**て**青年の福音**たるを得可き乎輯むる所嘉納治五郎、杉浦重剛、大槻文彥、島田三郎、横井時雄、三宅雪嶺、井上哲次郎、大隈重信、志賀重昂、加藤弘之、陸等**青年教育**熱心なる人々の談叢なり

駿臺隱士著

學生座右叢書第一編

最近記憶法

正價廿錢 郵稅四錢

記憶力と理解力とは修學の二大原素なり、而かも記憶力は年齢の增加と反比例の傾向を有す、畢竟これ記憶術の修練缺乏の結果なりとす著者從來の經驗と苦心の結果實用に適せる最近の方式を採り極めて平易なる文字を以て書かれたるもの即ち本書なり

涵養社編纂

學生座右叢書第二編

中學新式勉學要訣

正價廿五錢郵稅四錢

本書は勉學の要訣を叙述するに極めて新式を取り中學生が最良の參考書たるを期したり、理科、外國語、數學、國語、作文、歷史、地理、漢文等總て普通學の最要科目に就てこの研究方法を親切叮嚀なる筆を以て書きたるもの執筆者は博士學士等皆方今有名の大家なり

早田玄洞君著（肖像入）

李鴻章

正價廿錢 郵稅四錢

世界近代の三大豪傑は唯ぞ即ち英のグラッドストン獨のビスマーク清の李鴻章是れなり、頃日彼れ我國兒童走卒猶彼れが名を知る而して彼に關する著作なし嗚呼これ偉人を待つの道ならんや本書は實に彼れが貧賤より起つて現在の位置に達したる迄の經歷を描き以て一は立身出世の好材料とすべく一部の東洋史となす可し日清戰爭を漏さず團匪事件を忘れさるの國民豈に一讀せずして可ならんや

第一編 宮本武藏

嚴谷漣山人序
黑田湖山人編
日本武將お伽噺
小島冲舟密畫
色刷菊版美本

第二編 山中鹿之助

東京神田區銀冶町 大學館發行

長田偶得君著
岡落葉君密畫

三版

逸事奇談 明治六十大臣

正價三十錢　郵稅四錢

明治十八年內閣の改革以來大臣の職に上つた人は總計六十人である、著者例の健筆を揮つて六十人が大禮服を拔き去つた眞裸其儘の所を描く一讀噴飯抱腹絕倒

岩崎徂堂君著
岡落葉君密畫

三版

中江兆民奇行譚

肖像畫蹟挿入　正價廿五錢　郵稅四錢

兆民居士は一世の奇才なり、奇言人を驚かし奇行世を駭し、舌鋒劍の如く活動雷の如し、嗚呼此の奇男兒不治の病に罹つて病褥に在り、今にして居士が奇言奇行を蒐め以てこれを剞劂に附するは即か、著者の感する所あればなり。

矢野滄浪君著

寫眞版數葉挿入

食客

（再版）

正價廿錢　郵稅四錢

胸間燦爛たる勳章を掲げ駟馬に鞭ちて帝閣に上る、幾多英傑の前身を究むれば微々たる一貧生に過ぎざりしなり、奴婢と居を同ふして薪水の勞に服せしなり、唯そ堅忍不拔の食客なりし、勤勉力行よくその成効を致したる所以なりとす本書著者が實踐したる閱歷を描くに趣味饒多の筆を以てす、一讀解頤の腕を扼するの憤慨あり、再讀、三讀案を打て呼ふの快事あり、

巖谷漣山人序◎生田葵山人著

寫眞版數葉挿入

少年小說 進擊隊

（再版）

正價廿五錢　郵稅四錢

葵山人「少英雄」を著して「滿天下の少年」を慰藉し興奮す「進擊隊」を讀むの少年必ず快哉三呼して大に爲すあらずんば已まざるべし、漸くに舊習の弊を一掃し國の少年をして意氣沮喪せしめんとす然れば即ち本書の功は啻に一讀消閑の具たるに留らず、また以て少年教育の一端を補ふに足るものあるなり

東京神田鍛冶町十七番地
大學館

豪傑叢談

全部拾册

洋装美本一

正價一金貳拾五錢　郵税四錢

第壹編　宮崎來城君著　**多情の豪傑**

第貳編　宮崎來城君著　**豪傑の臨終**

第參編　宮崎來城君著　**豪傑の少時**

第四編　岩井松風軒著　**豪傑の遺訓**

第五編　宮崎來城君著　**豪傑の雅量**

目次左の如し

○源頼朝○源義經○平重衡○木曾義仲○曾我祐成○楠正行○藤原藤房○高師直○尊良親王○高師秋○新田義貞○新田義興○平通盛○柴田勝家○平維盛○豊臣秀吉

豪傑の氣象は臨終の間に於てこれを見る、來城子獨擅の健筆を振つて無數の古豪傑が臨終を描く一讀慄然も起つ可く鬼神も泣くべし

蛇は三寸にして人を呑むの慨あり、豪傑の豪傑たるはそれ天品に依るか又聞く大器晩成の語あり豪傑の豪傑たるはそれ鍛練に依るかこれを知らんと欲せは須らく豪傑か少年時代の冒險擧止に徵せよ

創業は易し守成は難し、英雄の苦心はその子孫の業に在り、遺訓を遵守するもの以て榮へ背戻するもの衰ふるは歴史に徵して明なり、有爲の青年なるもの一册を座右に置いて朝夕の鑑とすべし

時豪傑が亂世に於ける慣用手段たる權謀術數以外に一種の天眞潤達なる襟度を以て人を迎へたる絶好の逸話、茲に例の健筆を以て寫し出されたるもの一讀光風霽月の想あらん

寫眞版　數葉入

宮崎來城君著

乞食旅行

正價廿五錢　郵税四錢

腹に萬卷の書を貯へながら旅行のしたさに缺碗と片手に乞食の仲間入して彼處此處と經廻くつた實歴談である三日したら止められぬといふ乞食の境遇はどんなものか來城氏が無錢旅行を讀んだ人はその趣味の多いことを知つて居る、從て本館が喋々せずとも、一つ讀んでみたいという氣になるであらう

嚴谷漣山人序◎生田葵山人著

寫眞版　數葉入

少年小説

少英雄

正價廿五錢　郵税四錢

生田葵山人が少年小説に獨特の麗筆を有するは既に文壇の公評たり、本書は山人が苦心經營の著作數篇を蒐錄したるものにして篇中の主人公が或は勇氣無邪氣にして或は天眞なる所如何にして快活に少年諸君を心醉せしむるや否や試に一誦してその好伴侶たるを知り玉へ

東京神田鍛冶町十七番地　大學館

豪傑叢談

全部拾册　洋装本　正價一册金貳錢　郵稅拾五錢

第六編　西山筑濱君著
豪傑の交際

交際は即ち處世法なり交際に拙なる者は世に迎るゝは自然の致なり、異色異種の人物交々來り接す此間に處して如何に談話し如何に待遇すべきや豪傑が苦心また甚だしきものあり此書これを附いて些の餘蘊を見す

第七編　岩井松風軒著
豪傑の信仰

英雄豪傑の壯業偉蹟は實に渠れが信仰の產物なり、神か、佛か、人か物か、道か、理か物か渠等は其の一の或ものを崇拜し以て志を成したるものなり本書詳に之を說ふ

第八編　西山筑濱君著
豪傑の修養

大事業の下には大なる準備あり偉人の素には大なる修養あり修養は活動の第一義なるの語を知る者須らく此書に就て如何に英雄豪傑かその素養に力むるに困苦勉勵せしかを見よ

第九編　宮崎來城君著
續多情の豪傑

義に、多情の豪傑一編を著して滿天下の耳目を驚倒したる著者更に其魂れたる戰國の勇將猛士が情事を寫す瑰奇俊麗の筆致は讀くを用ゐず讀む者恍惚として自失せずんは幸のみ

第拾編　西山筑濱君著
豪傑と奧方

豪傑を知らんとするには先づ夫人の研究を要す、女子か男子に及ぼす勢力等大なるものあれば、此書或は叙說し或は評論し俊髭と佳人双々點綴する處一部小說を讀むの感あり

文學士白河鯉洋君序　宮崎來城君著
楊貴妃
第五版　正價廿三錢　郵稅四錢

帝國大學教授內藤瓏叟先生序　黑河內與四郎君著

著者夙に漢文學に精通し清國に歷遊して人間未見の書に涉獵すること多年其瑰奇無双の筆を以て天下無双の國色を描く材料嘗新にして艷麗の逸話萬錄して漏すなし一讀するもの身は二千年前に生れ面前貴妃か美貌に接し珊言を耳にするの感あらん。

靜御前
第四版　正價參拾錢　郵稅四錢

帝國大學國史科に於て、鎌倉時代國史を專攻せし著者が數十の奇書珍本を材料とし該博なる學識と流麗なる健筆に依りて靜御前か幼時より其最期に至る迄極めて正確に物せられたるもの殊に其後經と其關係の如きは最も詳細を極む堪の坊間散逸杜選の詳傳とは同一の談に在らざるなり。

文學博士三宅雪嶺先生序　岩井松風軒君著
小野小町
第參版　正價廿五錢　郵稅四錢

極美の女流として、非凡の歌仙として、の小野小町が九十二年間の生涯の榮枯盛衰を叙したるもの材料は正確豐富文章は流麗暢達、從來不可思議の裡に疑惑を留めし小町の事跡は此書に依て、始めて明晰に解決せられたり。

松村介石君序　光井深君著
學生自活法
附錄　東京諸學校案內　同入學試驗問題

再版　正價拾五錢　郵稅四錢

都下何十萬の學生の中能く其業志を貫くもの幾人かある、半途にして鄉里に歸るもの多くは惡寬の爲めに病寬の爲めに、失敗するもの頗る多し、暗きが故なり獨立獨歩の勇なきか故なり光井君此書を著はして此書あり出京の學生に與へ其里閭たる都下の事情に親切丁寧なる事親切丁寧なる事恰針盤たりと言ふべし

文學士梶川鳥城君序　林稻洲君著
理想の良人
正價十七錢　郵稅二錢

此書は未婚の男女兒を持るて父母兄姉の一讀を要す、未だ嫁せざる女子の爲めに未だ娶せざる男子の爲めに親切なる勸告と撰擇法を說く此書を讀みたるものは娶を離別するの不幸なく離緣せざる悲哀に際會せざるべし娶するに此書は未婚の處女に向て無双の教訓書なり既婚の婦人に向て絕好の座銘なり

俠文章

笹川臨風君序　田岡嶺雲、宮崎來城君合著

正價廿五錢　郵稅四錢

文學士辰己小二郎君序　岩井松風軒君著

第四版　正價廿五錢　郵稅四錢

嗣堂の奇俠兒嶺雲來城の二氏か天下を跋渉し、事に感し物に觸れ、一時に進出せるも熱血の餘瀝を集めたるもの即ち此俠文章なり奇警、奇拔、意氣天を衝く、奇ふの觀あり、一讀爲めに泣く再讀爲めに怒る。

遊仙窟評釋

以て知る可し、本書は訓讀解義譯解の三點に分ち最も平易の語句を用ゐ通俗的に評釋したるものなり。

信夫恕軒翁序　岩井松風軒君著

再版　郵稅二錢　正價十三錢

遊仙窟は唐の文張成が仙女に託し、戀愛の眞想を敍述したるものにして、文章の艷麗巧妙なること空前絕後と稱せらるる我國にては十有餘年前學士伊時なるもの、嵯峨天皇の命を本け靈龜の據下に讀て訓點を受たり、馬孝等が景色、人品、人情を敍するに當り此書に範る所甚だ多し古來文士の愛誦せしこと長恨歌は唐の文豪白樂天の傑作也○全篇百二十句の長詩也○玄宗皇帝好色の顚末也○美人楊貴妃の一代記也○色慾侈奢を戒むるの文也○文章優麗巧妙絕倫也。

長恨歌評釋

宮崎來城君序　吉田谿南君著

再版　郵稅二錢　正價十三錢

本書は驚々傳、章臺柳傳、楊娼傳並に琵琶行を副讀、釋義、譯解に分ち最も通俗に解釋せるもの、なり來城氏本書に序して曰く方今文士の漢詩漢文を讀むもの多くは六家、八家の門庭を窺ふの外、復た片眼の麗辭に渉るなし之を矯むるは這補の文を示し把玩三味、以て別樣の詩情と、別樣の文情を知らしむるに在りと。

美人傳評釋

唐代名著作

琵琶行評釋

白樂天傑作

宮崎來城君序　金田雪窓君著

第四版　郵稅四錢　正價廿五錢

本書集輯せる所一切我邦の閨媛才女に係り、毫も異邦の人物を加へず、これ我邦には我邦の奇粹あり、特色あり、神韻あり、精華ある所以にして或は德行を以て著はれ、才色を以て勝れる必すしも一定せず、而し書中時に校書娼婦を挿記するは砂裏の黃金泥中の蓮花なきに非さるを以てなり、苟くも世の婦人貞婦賢母となる志あらば必ず一本を備へざる可からず。

女流の偉人

文學博士井上哲次郎君題字　文學博士元良勇次郎君序

希臘人キセノオオーン著　木村鷹太郎君譯

ソクラテース人物養成譚

第四版　正價十錢　郵稅六錢

◎本書は「フランクリン」無二の愛讀書なり◎本書は聖哲「ソクラテース」が單身市井を徘徊し快妙の方法により各種各異幾多の人物を養成したる奇絕の事業談なり◎本書は「ソクラテース」の性行經歷逸事は殘らず網羅せり◎本書は西洋論語として其名高く歐米諸國教育家が必ず一本を携帶せざるなしと云ふ

公爵近衛篤麿君序　島田三郎君序　法學士桑田熊三君序　法學博士中村進午君序

柳瀨勁助君遺著

社會外の社會 機多非人

第三版　正價廿五錢　郵稅四錢

全力を盡して機多非人の生活、信仰、道德、婚姻、職業、交際、起源、人口繁殖、沿革、過去、將來、救濟法を研究し、其結果を公表するに至らずして逝去せられ柳瀨勁助氏の遺著にして別天地たる該社會の奇習一として洩らすことなし、

岩崎徂堂君著

人物と長所

實價廿五錢　郵稅四錢

此書に揭る人物は皆居れ現時社會に活動せる活人物にして其長所を描く極めて警拔適切其間滑稽あり、奇智あり、贈力あり、血あり、涙あり百名士か百長所は彩霞自霧の間に點綴して天地の壯觀を呈す

岩崎徂堂君著

明治豪商苦心譚

再版　實價廿錢　郵稅四錢

虛手巨萬の富を作り、空拳經濟界の覇權を握りつゝある豪商大賈が今日の地位を致したる苦辛はそれ如何、富を奚み名を欲するの人は須らく先づ此書に就て悟る所あらん、

岩井松風軒著

情の清盛

實價廿八錢　郵稅四錢

人間を觀察するに最も趣味あるものは、是れ情也日本史上の逸樂と言へば、平相國を見るに、此一面の歡興より、何ぞ柳折花の逸樂や、著書が暢達せる筆は此一怪傑に生命を與へて如何に能く百花の爛熟たる春光を此書の表に現出せしめんとするぞ、

宮崎來城君著　岡落葉君筆寫眞版數葉入

乞食旅行

正價廿五錢　郵稅四錢

頭に高卷の書を貯へながら旅行のしたさに映画を片手に乞食の仲間入して彼處此處と經廻くつた歴談である、三日したら止められぬといふ乞食の境遇はどんなものであらうか來城氏の無錢旅行を讀んだ人はその趣味の多い事を悟るであらう、

矢野滄浪君著　寫眞版挿入

無錢旅行　食客

正價廿錢　郵稅四錢

本書は著者が實踐せし事柄を言文一致を以て描かれたるものにして食客が辛酸困苦の境遇不平憤懣の生活讀むものをして身その中に在るの感を起さしむ寔に近時片々たる駄小説に比して趣味優ること數番なるのみならず其愚の書生に慰藉を與ふること甚だ多し、

巖谷漣山人著　生田葵山人著　寫眞版數葉挿入

少年小説　少英雄

正價廿五錢　郵稅四錢

生田葵山人が少年小説に獨得の能を有するは既に文壇の公評たり、此書は山人が田園生活數ケ月間に於けるの苦心經營の作數篇を蒐めたるものにして其の篇中の邪氣にして勇氣あるその天眞にして快活なる篇中の無主人公は如何に少年諸君が敬慕する所なるか試に節してその好伴侶たるを知り玉へ、

原田東風君著　小山榮達君著

木賃宿

正價廿五錢　郵稅四錢

社會下層の狀態を描いて精細、苟くも貧民問題勞働問題に關して警醒するの士は一讀せざる可からざるの書なり社會の暗面を謠ばんする詩人は最も適切なる參考書なり。

長田偶得君著　岡落葉君畫　三版

逸事奇談　明治六十大臣

正價廿五錢　郵稅四錢

明治十八年内閣制度改革以來今日に到る迄の大臣六十人の逸事奇談を描きたるもの大禮服きて威儀殷然たる大臣は猶鼻祖一枚の裸男となりて讀者の前に現れる可し。

岩崎徂堂君著　岡落葉君畫　三版

中江兆民奇行譚

正價廿五錢　郵稅四錢

明治の奇男兒中江兆民居士が奇言奇行を描きたるもの、滑稽あり嘲罵あり諷刺あり狂態あり一讀卷を捨つるに及びず。

押川春浪君著　岡落葉君畫

世界怪奇談第一編　奇人の旅行

正價廿五錢　郵稅四錢

世界怪奇譚の第一編として著書の尤も苦心する所冒險思想を筆ひ旅行の趣味を解し世界的知識を得るには尤も趣味多くして有益なる書なり

押川春浪君著　岡落葉君畫

怪人奇談

正價廿五錢　郵稅四錢

表題已に人目を驚かすより見ても如何に記事の奇怪なるを推想するに足らん人外狂、奇狂士、戰場の花各々詩趣ありて、讀者をして飽く事を知らしめず。

押川春浪君譯著　寫眞版數葉入

世界怪奇談 第二編 世界武者修行

正價廿五錢　郵稅四錢

如意棒を提げて天下を横行する快男兒が驚天動地の活動は如何、碧眼黛さ豚尾仰天す壯快痛絶

平野紫陽君著

文學奇瑞談

正價廿五錢　郵稅四錢

天地を動かし、鬼神を泣かしむ和歌の功大なる哉武士夫婦の情を和ぐる俳諧の德偉なる哉和歌俳諧の功德冥々の中爭ふ可からざるものあり、文章詩歌が神佛か惑はする中に可からざるものあり、本書は古來歷史上の奇瑞不思議の逸話を蒐錄せるもの閑の具には無比の好著にして又得易からざる參考書なり

峻谷漣山人序　生田葵山人著

少年小說

進擊隊

寫眞版挿入　正價廿五錢　郵稅四錢

生田葵山人が「少英雄」を綴きたるものは必ずやこの「進擊隊」を讀まざる能はざるべし、少年の血潮向ふ所鬼神を泣かしめ、山嶽を撼動す好箇の少年山人の筆に依て愈々活動し破天荒の事業を演出せんとす、挿畫鮮麗亦以て机上の珍とするに足る、

宮崎來城君著　岡落葉君筆寫眞版數葉入

無錢旅行

著者寫眞肖像版　三廿五錢　正價　郵稅四錢

旅行の面白味は汽車に在らず、汽船に在らず、馬に在らず、所謂徒歩無錢にして千山萬壑を跋渉するに在り風を咨び露を飲み乞食と合宿するなど辛苦の中に忘れ難き趣味の存するものあり、此書世に出でゝ忽ち數千部を賣り盡せり以て如何に壯快なる讀物なるかを知れ、

文學士辰巳小次郎君序　岩井松風軒君著

淀君と太閤

第四版　正價廿八錢　郵稅四錢

瀧志嶺行の徒妄りに英雄の皮相を學んで精神を解せず天下泗々として文弱柔靡に陷る、此に松軒子萬丈の氣焰を吐き絶代の英傑豐太閤の如きも淀君の色に溺れては六十餘州の精華一夢の中に奪はる、慘劇を叙すこの段極めて痛快一讀卷を打て絶叫すべし。

本田種竹君序　長田偶得君著

維新豪傑の情事

第三版　正價二十五錢　郵稅四錢

醉うては枕す、美人の膝、醒めては握る天下の權、千軍萬馬九死の間に於て、猶且つ餘裕ある英雄が風流韻事閑日月の逸興を寫す、楚々たる華致を以て

薩摩侯大久保利通及び其時代の史傳は即ち維新政業の肥事なり、精政漿の最も考究の要あるものなり、

渡邊修二郎君著

大久保利通の一生

再版　正價三十錢　郵稅四錢

著者は顏る趣味に富み、「高杉晉作」「木戸孝允」の二傳を著して好評喝々たり、今此傳を草して薩長傑士と近代國事との關係を詳にし併せて明治政府の由來を觀察するに最も精密國史にし志すもの一本を購うて可なり。

文學士飯田吹萬君序　帝國大學俣野節村君著

偉人の言行

再版　正價廿五錢　郵稅四錢

日本歷代無慮數百名の偉人が品操、氣韻、深慮、贈識、修養、洒落、雅量等各方面に涉りて特出し後世の模範となる可き其平生と裏面の性行を寫す、爲の青年が以て志氣品性を養ふの好具伴たるに適す。

渡邊修二郎君著

青年と立身出世

再版　正價廿錢　郵稅四錢

立身成功の事偶然之を求む可からず然らば其策如何卽ち雌雄、敎育、實驗の三者と百折不撓の精神と是れなり今これを細目に分つ事二十箇條叙述叮嚀親切只管青年成功の道を解き兼ねて、失敗の因を敎ふ附錄には今世人士の生涯、茜大學生特藝三對表、各藩貢進生表の三篇を添へたり實に机上の好裝飾たり。

涵養社編纂

中學 新式勉學要訣

正價廿五錢
郵稅四錢

學を務むるに法あり法を誤れば貴重なる時間と莫大なる金錢とを散ずて得る所零のみ本書は此の弊害を矯めて偏に青年が勉學の指南車たらんを務めたれば中學生には宜しき參考書たるを得べし

西山筑濱君著

戰國時代 少年武者

正價廿五錢
郵稅四錢

少年武者が活動は果して如何筑濱君の筆これを描いて面目躍動せんとす腥風血雨の巷々の緋威の鎧袖の如何に勇ましきよ月光花影の下その小姓姿の如何に愛らしきよ、

岩崎徂堂君著

名士の兄弟

正價廿三錢
郵稅四錢

世の中に愉快なる事少なかられど其中にも一つ生れ一つ處で育ち、一つ乳房を吸つて、一つ學校に通つた兄弟が漸々と成長して、共に青雲の地位に昇つた程愉快な事はあるまいこの書は現今有名な人達が兄弟の傳記を面白く描いたものであらふ、讀む人の爲めには大に立志の興奮劑となるであらふ、

須藤諷山君著

名士名家の夫人

正價廿五錢
郵稅四錢

古今東西名を農け產を興すの人士はそが夫人の內助扶掖に依るもの多し、世に名士名家の傳記逸話の行はるゝや久し、獨り夫人に關するもの無かるべけんや本書叙筆平易にして項目頗る饒多讀んで面白く且つ有益なり、

渡邊修二郎君著

奇傑雲井龍雄

肖像入
正價廿錢
郵稅四錢

渾身骨膽、奇言奇行、眇たる一書生の身を以て徒手破天驚地の壯舉を試み、終に奇禍を得て刑場一片の露と消へたる明治初年の快男子雲井龍雄が幼時より其斬首に至る間の性行、奇事を輯めて一編の傳となしたるもの附錄に雲井龍雄文詩を掲ぐ、

渡邊修二郎君著

俠傑高田屋嘉兵衛

肖像入
正價廿錢
郵稅四錢

嘉兵衛是れ市井の一夫のみ、而して國家の爲に犧牲となりて海外に捕はれ惡もの國辱を爭しめ千鈞の難關に處して彼我の間の事情を疎通し寃に平和に事局を結了するを得たり嗚呼爲ぞ傳せざる可んや著者頃日露人の記錄等を得て材料頗る豐富なり、日露交渉の事蹟は其多趣多味なること遙に小說稗史の上に在り、

押川春浪君著　寫眞版挿入

航海奇譚

再版
正價廿五錢
郵稅四錢

大洋と言ふ已に快也、航海と言ふ已に壯也、奇譚と言ふに至つては競うて讀まざる能はず、大平洋を馳る船大西洋に沈む甲板に起りたる辟鬼出沒の活劇、奇絕にして趣味多く快絕にして感興甚だし、目一海上の怪、孤島の奇遇、幽靈島、海の貴婦人、海軍次〜士官、無名の碑、俠血男兒、二人胡弓師、

柴田流星君著　寫眞版挿入

海之冒險

正價廿五錢
郵稅四錢

英國の少年は好て冒險小說を讀む、而もその重なるは海に關するものなり、英吉利國の人々四六時中日を見ざるなしと誇る亦宜哉海の冒險は海の日本人かなせる海の事業を叮嚀に親切に正直に述へたるもの金華山沖に暴風と戰ひ占守島に郡司大尉と談じ露領コマンドルヌキー島に萬歲を唱ふるが如き何等の快事ぞ、海國の男兒は敢なき海に死せざるなり、

緒方流水君序　石橋玄潮君著

新體詩指南

正價廿五錢　郵税四錢

新體詩の性質を明にし、其作法を詳說し、附する語句之が模範たる作例と、之を組織すべき資料たるもの、新體詩自修の指南車は本書を措て何れにか之を求めん、

石橋去潮君編

韻文花天月地

正價廿五錢　郵税四錢

本書收むる所は當時有名の新体詩人の作にして其華を拔き其精を選ひて之を集む、其數七十有餘頁にして是れ四時花鳥風月の友天地の有情を敎ふるものは即ち之なり、

文學士粟田木岡君序　渡邊幾石君編

美文資料美辭麗句

再版　正價廿錢　郵税四錢

本書は部門を季候（春、夏、秋、冬）地理、天文、人品、品性、人情及人事等に分ち更に百有餘の細目に分ち以て索引の便を計れり、蓋し作文の好資料にして苟しくも文筆を弄するの士が座右の次として裨益少なからざるを信ず、

國府犀東君序　香川怪庵君述

文士政客風聞錄

正價拾五錢　郵税貳錢

方今其名喧々たる政治家、文藝家が奇話珍聞を蒐めたるもの、滑稽あり、洒落あり、豪放あり、奇矯あり、風流あり、悲慨あり、面目躍如として紙上に活顯す、

村上濁涙君編輯
知名大家寄稿

海陸大探險

（正價廿錢　郵税二錢）

材料豐富、寫眞版十數枚

同上

世界第一讀

（正價廿錢　郵税四錢）

青年は以て智識を養成すべく！

少年は以て思想を練磨すべし！

（既刊）

第一號より第六十六號迄

一冊九錢　六冊五十二錢　十二冊九十六錢

實用英語

郵税各一錢

○本誌は日常從事する職務の爲めに校堂に登りて正則なる語學を受くる能はざる篤志者の敎育を爲めに初學自修の欄を設け是等の人が自宅獨習の便宜を計れり

○本誌は英語敎育に關する一切の項目を網羅し洩さず摘載するを以て初學者も座右一冊を備ふるあれば英語學研究上少なからざる便益を得ん

賛成員及寄書家

イーストレーキ氏　井上十吉氏　服部宇之吉氏　花輪亮太郎氏　神田乃武氏　棚橋一郎氏　高楠順次郎氏　高橋五郎氏　坪内雄藏氏　佐久間信恭氏　菊池武夫氏　宮本正貫氏　勝浦鞆雄氏　朝倉外茂鐵氏　野田朝次郎氏　其他數十名

17/6/31

池田錦水君著

社會各面 女心の解剖

正價三十錢　郵稅四錢

緒論
容貌＝美人―人並―醜婦
年齢＝老婆―年增―新造
―小女
風土＝關東婦人―關西婦人―山國婦人―海邊婦人―都會婦人―田園婦人
職業＝女教師―產婆―女髮結等數十種
妻女＝令夫人―細君―內儀―女將―嬶
處女＝令嬢―女學生―町娘―阿魔
世外婦人＝後家―尼
結論（婦人一貫の心情）

井上啞々君著　岡落葉君著

◎遊學書生

正價廿五錢　郵稅四錢

本書は無邪氣無垢の青年が東部に遊學して、周圍の惡風に依り誘惑に乘ず不識不知墮落する傾向を眞面目に描きたる新當世書生小說的、寫實的の皮肉文字は如何に讀者をして印象深からしむるか、乞ふ精讀し得意の文字意外の趣味を覺れ。

葛城天華君著　岡落葉君著

◎女義太夫の裏面

正價一十五錢　郵稅四錢

女義太夫の裏面を描いて、周密精細讀者は其意外に驚き、その墮落に驚く可し、著者探索見聞の結果、此に本書を著はして、世を警醒せんとす。多年附錄として、女義太夫表、語物一覽小說的短篇、を添へたり、表

博言博士イーストレーキ君著

英作文添刪詳解

再版　正價廿三錢　郵稅二錢

「イ」氏門生の英作文數多を撰擇して、字々句々に精密の添刪を加へ、其全文には全體の評論を下し以て英作文練習の方針を示し、邦文を以て添刪評論の理由を詳說したる英學界未曾有の珍書なり、

博言博士イーストレーキ君著

英和通辯 日用單語自在

第三版　正價參拾錢　郵稅四錢

英米日用の慣用語句一千數百を集めて之を二十種に類別し同氏自ら正確の發音を施し加ふるに末尾に單語數百をも類別に附しあれば初學者は勿論特に中學生座右必須の良書なるべし、

菅野德助君著

フランクリン自叙傳詳解

再版　正價參拾錢　郵稅四錢

國民英學會講師として「實用英語」記者として英文の註譯を以て芳名噴々たる菅野氏が其精致なる頭腦により詳密の註解をしたものなれば坊間流布の無雜の書と其の選を異にするは勿論實に中學生必携の書、

文學士宮本正貫君序　虎城山人編

作文必携 助字用法詳解

四版　正價十五錢　郵稅貳錢

也、矣、焉、乎、哉、耶、耳、爾、已、殆、幾、蓋、夫、抑、即、乃、輙、即、便、倘、尚、仍等の助字數百を類集し、各字の意義、用法、異同等皆實例を擧て詳說せり、

侯爵西園寺公望君題字　岡鹿門君序　財間榮君編

作文必携 熟語成句詳解

故字熟語數千を集めて、之を精密の意義、文字の出處、故事來歷を詳說して、之を「いろは」一別に區別し、尙ほ索引に便なる爲め種類目錄をも付しあれば引用に便にして、文筆に從事せるもの座右必須の要典なり、

四六版　正價廿五錢　郵稅四錢

文學士宮本正貫君序　虎城山人編

漢文速成 和文漢譯秘訣

和語を漢語の語勢に變更する練習法なり復文十數例を擧げて實字、虛字、助字の用法及語句の轉倒配置を一字一字詳說し、又譯文の異同を識別し代を會得せしむる爲同一文を數種に漢譯したる名家の和文漢譯例を示し譯文の方法秘訣を詳說せり、

正價十五錢　郵稅貳錢

法學士　加藤正雄君序　南海道人編　（挿畫三十二個）

書法秘訣 習字速成圖鮮

本書は永字八法、草字筆法、一文字五形修練術、忍返し筆法執筆法等を總て圖を以て詳說し、其他執筆運筆、姿勢、習識、四修、習慣、文學之長、筆勢、筆拍子、去欠、黑色生字、死字、病字等の秘訣、魏人碑、王羲之、晉成帝、柳公權、東坡等の書法傾意より書體の種類、筆道の用具に到るまで詳細不漏

涵養社編纂

現代大家 青年の憲法

如何にせば成効すべき乎、滿堂幾萬の學生が日夜熟慮する問題は不幸にして往々解決せざるものあるは何ぞこれ精神を顧みずして形式を學べばなり、本書幸に此等の弊を矯め青年の福音たるを得べき乎十二大家の青年教育談は本書獨得の紀事なり、

三六版　正價廿錢　郵稅四錢

96
44

96
74

005091−000−9

96−74

名士の兄弟

岩崎　徂堂／著

M35
ACE−1892